

## 基本計画書

基本計画書									
事項	記入欄								備考
計画の区分	学部の設置								
設置者	ガッコウホジツン シンジュウオホタニガクエン 学校法人 真宗大谷学園								
大学の名称	オホタニガク 大谷大学 (Otani University)								
大学の位置	京都府京都市北区小山上総町20番地								
大学の目的	本学は教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献することを目的とする。								
新設学部等の目的	グローバル社会において、建学の精神（「人格純真」、「相互敬愛」、「本務遂行」）に基づいて自己のアイデンティティを確立し、多様な他者の存在に気づき、寄りそうことのできる人物の養成をめざす。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	国際学部 【Faculty of International Studies】 国際文化学科 【Department of Intercultural Studies】 計	4年	100人	—	400人	学士（文学） 【Bachelor of Arts】	令和3年4月 第1年次	京都府京都市北区小山上総町20番地	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	国際学部 国際文化学科 (100) (10) (令和2年3月認可申請済み) 文学部 国際文化学科 (廃止) (△90) ※令和3年4月学生募集停止								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数					卒業要件単位数		
	国際文化学科	127科目	160科目	4科目	291科目	124単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
	新設	国際学部 国際文化学科	教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等
		計	5(5)	5(5)	0(1)	0(0)	10(11)	0(0)	120(120)
	既設	文学部 真宗学科	3人	5人	1人	2人	11人	0人	41人
		仏教学科	3(3)	3(3)	2(2)	2(2)	10(10)	0(0)	33(33)
		哲学科	3(3)	2(2)	1(1)	2(2)	8(8)	0(0)	40(40)
		歴史学科	8(8)	2(2)	1(1)	2(2)	13(13)	0(0)	78(78)
		文学科	4(4)	2(2)	2(2)	2(2)	10(10)	0(0)	38(38)
		社会学部 現代社会学科	6(6)	4(4)	1(1)	0(0)	11(11)	0(0)	87(87)
		コミュニティデザイン学科	5(5)	3(3)	3(3)	0(0)	11(11)	0(0)	81(81)
教育学部 教育学科	13(13)	5(5)	2(2)	0(0)	20(20)	0(0)	114(114)		
計	45(45)	26(26)	13(13)	10(10)	94(94)	0(0)	—(—)		
合計	50(50)	31(31)	13(14)	10(10)	104(105)	0(0)	—(—)		
教員以外の職員の概要	職種		専任		兼任		計		
	事務職員	71人		35人		106人			
	技術職員	0(0)		0(0)		0(0)			
	図書館専門職員	7(7)		19(19)		26(26)			
	その他の職員	0(0)		0(0)		0(0)			
計	78(78)		54(54)		132(132)				
校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用		計			
	校舎敷地	0.00㎡	41,194.92㎡	0.00㎡		41,194.92㎡			
	運動場用地	0.00㎡	23,655.48㎡	0.00㎡		23,655.48㎡			
	その他	0.00㎡	20,746.62㎡	0.00㎡		20,746.62㎡			
	合計	0.00㎡	85,597.02㎡	0.00㎡		85,597.02㎡			
校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用		計				
	6,444.66㎡ (6,444.66㎡)	46,999.11㎡ (46,999.11㎡)	153.81㎡ (153.81㎡)		53,597.58㎡ (53,597.58㎡)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設		語学学習施設			
	63室	52室	40室	8室 (補助職員 0人)		1室 (補助職員 1人)			
専任教員研究室	新設学部等の名称		室数						
	国際文化学科		11室						
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕	学術雑誌 〔うち外国書〕	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料	機械・器具	標本		
	国際学部 国際文化学科	913,727 [190,967] (889,727 [186,467])	6,693 [650] (6,648 [645])	115 [0] (115 [0])	2,115 (2,100)	30 (30)	0 (0)		
	計	913,727 [190,967] (889,727 [186,467])	6,693 [650] (6,648 [645])	115 [0] (115 [0])	2,115 (2,100)	30 (30)	0 (0)		
図書館	面積	閲覧座席数		収納可能冊数		計			
	7,604.82㎡	588		1,115,833		※大学全体			
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
	4,857.06㎡	柔道 場 弓道 場							

経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	※共同研究費等は大学全体。図書購入費、設備購入費は、大谷大学短期大学部との共用図書および設備として購入。図書費には、電子ジャーナル・データベースの整備費を含む。
		教員1人当り研究費等		350千円	350千円	350千円	350千円	—千円	—千円	
		共同研究費等		81,000千円	81,000千円	81,000千円	81,000千円	—千円	—千円	
		図書購入費	62,000千円	60,000千円	60,000千円	60,000千円	—千円	—千円		
設備購入費	33,000千円	32,500千円	32,500千円	5,500千円	5,500千円	—千円	—千円			
学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			※上段：国際学部国際文化学科、文学部・社会学部の各学科 ※下段：教育学部教育学科
		1,190千円	1,140千円	1,140千円	1,140千円	—千円	—千円			
		1,290千円	1,280千円	1,280千円	1,280千円	—千円	—千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			手教科、寄付金、補助金、受取利息・配当金収入等							
既設大学等の状況	大学の名称	大谷大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	文学部	—	408	—	1,943	—	1.10	—		
	真宗学科	4	60	—	250	学士(文学)	0.92	昭和40年度		※平成30年度入学定員減(△10人)
	仏教学科	4	25	—	100	学士(文学)	1.20	昭和24年度		
	哲学科	4	50	—	210	学士(文学)	1.10	昭和24年度		※平成30年度入学定員減(△10人)
	社会学科	4	—	—	—	学士(社会学)	—	昭和40年度		※平成30年度より募集停止
	歴史学科	4	105	—	405	学士(文学)	1.08	昭和40年度		※令和2年度入学定員増(5人)
	文学科	4	78	—	288	学士(文学)	1.20	昭和40年度		※令和2年度入学定員増(8人)
	国際文化学科	4	90	—	370	学士(文学)	1.19	平成5年度		※令和3年度より募集停止
	人文情報学科	4	—	—	—	学士(文学)	—	平成12年度	京都府京都市北区 小山上総町20番地	※平成30年度より募集停止
	教育・心理学科	4	—	—	—	学士(教育学)	—	平成21年度		※平成30年度より募集停止
	社会学部	—	220	—	660	—	1.05	—		
	現代社会学科	4	120	—	360	学士(社会学)	1.04	平成30年度		
コミュニティデザイン学科	4	100	—	300	学士(社会学)	1.06	平成30年度			
教育学部	—	130	—	390	—	1.02	—			
教育学科	4	130	—	390	学士(教育学)	1.02	平成30年度			
既設大学等の状況	大学の名称	大谷大学大学院								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	文学研究科	—	73	—	146	—	0.37	—		
	(修士課程)	—	15	—	51	—	0.32	—		
	(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—		
	真宗学専攻	2	20	—	40	修士(文学)	0.80	昭和28年度		
	(修士課程)	3	3	—	9	博士(文学)	1.10	昭和30年度		
	(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—		
	仏教学専攻	2	15	—	30	修士(文学)	0.13	昭和28年度		
	(修士課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.66	昭和30年度		
	(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—		
	哲学専攻	2	10	—	20	修士(文学)	0.10	昭和29年度		
	(修士課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.00	昭和31年度	京都府京都市北区 小山上総町20番地	
	(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—		※令和2年度より募集停止
社会学専攻	3	—	—	6	博士(文学)	—	平成13年度			
(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—			
仏教文化専攻	2	10	—	20	修士(文学)	0.65	昭和29年度			
(修士課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.00	昭和31年度			
(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—			
国際文化専攻	2	10	—	20	修士(文学)	0.05	平成11年度			
(修士課程)	3	3	—	9	博士(文学)	0.00	平成13年度			
(博士後期課程)	—	—	—	—	—	—	—			
教育・心理学専攻	2	8	—	16	修士(教育学)	0.18	平成25年度			
(修士課程)	—	—	—	—	—	—	—			
大学院	—	—	—	—	—	—	—			
大学の名称	大谷大学短期大学部									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
幼児教育保育科	2	—	—	—	短期大学士(幼児教育保育学)	—	昭和41年度	京都府京都市北区 小山上総町20番地	※平成31年度より募集停止	
大学の名称	九州大谷短期大学									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
仏教学科	2	10	—	20	短期大学士(仏教学)	0.85	昭和45年度			
表現学科	2	65	—	130	短期大学士(表現学)	0.69	昭和45年度	福岡県筑後市 蔵敷495-1	※平成31年度入学定員増(15名)	
幼児教育学科	2	100	—	200	短期大学士(幼児教育学)	0.75	昭和45年度			
福祉学科	2	20	—	40	短期大学士(介護福祉学)	0.47	平成11年度		※平成31年度入学定員減(△15名)	
附属施設の概要	[名称]	真宗総合研究所								
	[目的]	真宗あるいは仏教の立場から諸学問を総合すること、並びに仏教を通じた国際的な学術交流を推進すること								
	[所在地]	京都府京都市北区小山上総町 大谷大学真宗総合学術センター内								
	[設置年月]	昭和56年								
	[規模等]	専有面積 1,124.00 m <sup>2</sup>								
	[名称]	大谷大学博物館								
	[目的]	建学の精神に則り真宗・仏教文化財を中心に、考古学、歴史学、民俗学等に関する博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究を行い、本学における教育及び研究の発展に資するとともに、一般社会に公開すること								
	[所在地]	京都府京都市北区小山上総町 大谷大学真宗総合学術センター内								
	[設置年月]	平成15年								
	[規模等]	専有面積 1,069.48 m <sup>2</sup>								

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校舎」、「校舎等」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積り及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

## 学校法人真宗大谷学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和 2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和 3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
<b>大谷大学</b>				<b>大谷大学</b>				
<b>文学部</b>				<b>文学部</b>				
真宗学科	60	-	240	真宗学科	60	-	240	
仏教学科	25	-	100	仏教学科	25	-	100	
哲学科	50	-	200	哲学科	50	-	200	
歴史学科	105	-	420	歴史学科	105	-	420	
文学科	78	-	312	文学科	78	-	312	
国際文化学科	90	-	360	<u>国際文化学科</u>	<u>0</u>	-	<u>0</u>	令和3年4月学生募集停止
<b>社会学部</b>				<b>社会学部</b>				
現代社会学科	120	-	480	現代社会学科	120	-	480	
コミュニティデザイン学科	100	-	400	コミュニティデザイン学科	100	-	400	
<b>教育学部</b>				<b>教育学部</b>				
教育学科	130	-	520	教育学科	130	-	520	
				<b>国際学部</b> <span style="float: right;">学部の設置(届出)</span>				
				<u>国際文化学科</u> <span style="float: right;">定員変更(10)</span>				
計	758	-	3,032	計	<u>768</u>	-	<u>3,072</u>	
<b>大谷大学大学院</b>				<b>大谷大学大学院</b>				
<b>文学研究科(修士課程)</b>				<b>文学研究科(修士課程)</b>				
真宗学専攻	20	-	40	真宗学専攻	20	-	40	
仏教学専攻	15	-	30	仏教学専攻	15	-	30	
哲学専攻	10	-	20	哲学専攻	10	-	20	
仏教文化専攻	10	-	20	仏教文化専攻	10	-	20	
国際文化専攻	10	-	20	国際文化専攻	10	-	20	
教育・心理学専攻	8	-	16	教育・心理学専攻	8	-	16	
計	73	-	146	計	73	-	146	
<b>文学研究科(博士後期課程)</b>				<b>文学研究科(博士後期課程)</b>				
真宗学専攻	3	-	9	真宗学専攻	3	-	9	
仏教学専攻	3	-	9	仏教学専攻	3	-	9	
哲学専攻	3	-	9	哲学専攻	3	-	9	
社会学専攻	3	-	9	社会学専攻	3	-	9	
仏教文化専攻	3	-	9	仏教文化専攻	3	-	9	
国際文化専攻	3	-	9	国際文化専攻	3	-	9	
計	18	-	54	計	18	-	54	
<b>九州大谷短期大学</b>				<b>九州大谷短期大学</b>				
仏教学科	10	-	20	仏教学科	10	-	20	
表現学科	65	-	130	表現学科	65	-	130	
幼児教育学科	100	-	200	幼児教育学科	100	-	200	
福祉学科	20	-	40	福祉学科	20	-	40	
計	195	-	390	計	195	-	390	



教育課程等の概要															
(国際学部 国際文化学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
総合科目	人間学Ⅰa	1前	2			○								兼2	
	人間学Ⅰb	1後	2			○								兼2	
	人間学Ⅱ	2・3・4前・後	2			○								兼18	
大学導入	学びの発見	1前	2			○			1						
必修 外国語	外国語Ⅰ	英語Ⅰa	1前	1			○							兼4	
		英語Ⅰb	1後	1			○							兼4	
		ドイツ語Ⅰa	1前		2		○			1					
		ドイツ語Ⅰb	1後		2		○			1					
		フランス語Ⅰa	1前		2		○							兼1	
		フランス語Ⅰb	1後		2		○							兼1	
		中国語Ⅰa	1前		2		○			1					
		中国語Ⅰb	1後		2		○			1					
		韓国・朝鮮語Ⅰa	1前		2		○			1					兼1
	韓国・朝鮮語Ⅰb	1後		2		○			1					兼1	
	外国語Ⅱ	英語Ⅱa	2前	1			○								兼4
		英語Ⅱb	2後	1			○								兼4
		ドイツ語Ⅱa	2前		2		○					1			
		ドイツ語Ⅱb	2後		2		○					1			
		フランス語Ⅱa	2前		2		○							兼1	
		フランス語Ⅱb	2後		2		○							兼1	
		中国語Ⅱa	2前		2		○			1					
		中国語Ⅱb	2後		2		○			1					
韓国・朝鮮語Ⅱa		2前		2		○								兼2	
韓国・朝鮮語Ⅱb	2後		2		○								兼2		
共通基礎科目	選択外国語	英語読解（中級）1	1・2・3・4前		1			○						兼1	
		英語読解（中級）2	1・2・3・4後		1			○						兼1	
		英語読解（中級）3	1・2・3・4前		1			○						兼1	
		英語読解（中級）4	1・2・3・4後		1			○						兼1	
		英作文（中級）1	1・2・3・4前		1			○						兼1	
		英作文（中級）2	1・2・3・4後		1			○						兼1	
		英文法（中級）1	1・2・3・4前		1			○			1				
		英文法（中級）2	1・2・3・4後		1			○			1				
		英語のしくみと表現（中級）1	1・2・3・4前		1			○							兼1
		英語のしくみと表現（中級）2	1・2・3・4後		1			○							兼1
		英語会話（中級）1	1・2・3・4前		1			○							兼1
		英語会話（中級）2	1・2・3・4後		1			○							兼1
		英語会話（中級）3	1・2・3・4前		1			○							兼2
		英語会話（中級）4	1・2・3・4後		1			○							兼2
		英語会話（中級）5	1・2・3・4前		1			○							兼1
		英語会話（中級）6	1・2・3・4後		1			○							兼1
		英語読解（上級）1	1・2・3・4前		1			○				1			兼1
		英語読解（上級）2	1・2・3・4後		1			○				1			兼1
		英語読解（上級）3	1・2・3・4前		1			○							兼1
		英語読解（上級）4	1・2・3・4後		1			○							兼1
		英語会話（上級）1	1・2・3・4前		1			○							兼1
		英語会話（上級）2	1・2・3・4後		1			○							兼1
		英語会話（上級）3	1・2・3・4前		1			○							兼2
		英語会話（上級）4	1・2・3・4後		1			○							兼2
		英作文（上級）1	1・2・3・4前		1			○							兼3
		英作文（上級）2	1・2・3・4後		1			○							兼3
		英文法（上級）1	1・2・3・4前		1			○							兼1
		英文法（上級）2	1・2・3・4後		1			○							兼1
		インテンシブ英会話（中級）1	1・2・3・4前		4			○							兼3
		インテンシブ英会話（中級）2	1・2・3・4後		4			○							兼3
ドイツ語読解（初級）1	1・2・3・4前		1			○							兼2		
ドイツ語読解（初級）2	1・2・3・4後		1			○							兼2		

**教 育 課 程 等 の 概 要**

(国際学部 国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
共通基礎科目	選択外国語	ドイツ語会話（初級）1		1				○								兼1	
		ドイツ語会話（初級）2		1				○								兼1	
		ドイツ語のしくみと表現（初級）1	1・2・3・4前		1				○				1				
		ドイツ語のしくみと表現（初級）2	1・2・3・4後		1				○				1				
		ドイツ語読解（中級）1	1・2・3・4前		1				○			1					
		ドイツ語読解（中級）2	1・2・3・4後		1				○			1					
		フランス語読解（初級）	1・2・3・4後		1				○								兼1
		フランス語会話（初級）	1・2・3・4前		1				○								兼1
		フランス語読解（中級）	1・2・3・4後		1				○								兼1
		フランス語会話（中級）	1・2・3・4前		1				○								兼1
		フランス語のしくみと表現（初級）	1・2・3・4前		2				○								兼1
		フランス語のしくみと表現（中級）	1・2・3・4前		1				○								兼1
		中国語読解（初級）1	1・2・3・4前		1				○								兼1
		中国語読解（初級）2	1・2・3・4後		1				○								兼1
		中国語会話（初級）1	1・2・3・4前		1				○								兼1
		中国語会話（初級）2	1・2・3・4後		1				○								兼1
		中国語会話（初級）3	1・2・3・4前		1				○								兼1
		中国語会話（初級）4	1・2・3・4後		1				○								兼1
		中国語のしくみと表現（初級）1	1・2・3・4前		1				○								兼1
		中国語のしくみと表現（初級）2	1・2・3・4後		1				○								兼1
		中国語会話（中級）1	1・2・3・4前		1				○								兼1
		中国語会話（中級）2	1・2・3・4後		1				○								兼1
		中国語会話（上級）1	1・2・3・4前		1				○			1					
		中国語会話（上級）2	1・2・3・4後		1				○			1					
		韓国・朝鮮語会話（初級）1	1・2・3・4前		1				○								兼1
		韓国・朝鮮語会話（初級）2	1・2・3・4後		1				○								兼1
		韓国・朝鮮語のしくみと表現（初級）1	1・2・3・4前		1				○								兼1
		韓国・朝鮮語のしくみと表現（初級）2	1・2・3・4後		1				○								兼1
		韓国・朝鮮語読解（中級）	1・2・3・4後		1				○								兼1
		韓国・朝鮮語会話（中級）	1・2・3・4前		1				○								兼1
		韓国・朝鮮語読解（上級）	1・2・3・4前		1				○								兼1
		現代チベット語 a	2・3・4前		1				○								兼1
		現代チベット語 b	2・3・4後		1				○								兼1
ラテン語入門1	1・2・3・4前		1				○								兼1		
ラテン語入門2	1・2・3・4後		1				○								兼1		
ヒンディー語 a	1・2・3・4前		1				○								兼1		
ヒンディー語 b	1・2・3・4後		1				○								兼1		
小計（93科目）		—	12	108	0	—			4	2	1	0	0		兼57		
学科専門科目	演習	国際文化演習Ⅰ a	1前	2				○			4	3	1				
		国際文化演習Ⅰ b	1後	2				○			4	3	1				
		国際文化演習Ⅱ a	2前	2					○			5	5	1			
		国際文化演習Ⅱ b	2後	2					○			5	5	1			
		国際文化演習Ⅲ a	3前	2					○			5	5				
		国際文化演習Ⅲ b	3後	2					○			5	5				
		国際文化演習Ⅳ a	4前	2					○			5	5				
		国際文化演習Ⅳ b	4後	2					○			5	5				
	小計（8科目）		—	16	0	0	—			5	5	1	0	0		兼0	
	概論	国際文化概論	1前	2				○				4	2	1			オムニバス
国際言語概論		1後	2				○				3	3				オムニバス	
小計（2科目）		—	4	0	0	—			5	4	1	0	0		兼0		
講義	比較文化講義1	1・2・3・4前		2				○			1	3				オムニバス	
	比較文化講義2	1・2・3・4後		2				○			1	3				オムニバス	
	英米の文化1	2・3・4前		2				○				1				兼1 隔年開講	
	英米の文化2	2・3・4後		2				○				1				兼1 隔年開講	
	英米の文化3	1・2・3・4前		2				○								兼1	
英米の文化4	1・2・3・4後		2				○								兼1		
英米の文化5	1・2・3・4前		2				○				1				隔年開講		

## 教 育 課 程 等 の 概 要

(国際学部 国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
学科専門科目	英米の文化6	1・2・3・4後		2		○				1					隔年開講		
	英語学概論1	1・2・3・4前		2		○			1								
	英語学概論2	1・2・3・4後		2		○			1								
	英語のしくみ1	1・2・3・4前		2		○									兼1		
	英語のしくみ2	1・2・3・4後		2		○									兼1		
	ヨーロッパの文化1	1・2前		2		○									兼2		
	ヨーロッパの文化2	1・2後		2		○									兼1		
	東アジアの文化1	1・2前		2		○									兼1		
	東アジアの文化2	1・2前		2		○									兼1		
	日本ポップカルチャー論	3・4後		2		○									兼1		
	国際文化特殊講義1	3・4後		2		○									兼2		
	国際文化特殊講義2	3・4後		2		○									兼1		
	国際文化特殊講義3	3・4後		2		○			1								
	国際文化特殊講義4	3・4後		2		○									兼1		
	国際文化特殊講義5	3・4後		2		○									兼1		
	国際文化特殊講義6	3・4後		2		○			1								
	アメリカ文学講義1	2・3・4前		2		○				1					隔年開講		
	アメリカ文学講義2	2・3・4後		2		○				1					隔年開講		
	イギリス文学講義1	2・3・4前		2		○				1					隔年開講		
	イギリス文学講義2	2・3・4後		2		○				1					隔年開講		
	英文学概論1	1・2・3・4前		2		○				1							
	英文学概論2	1・2・3・4後		2		○				1							
	ドイツ文学講義1	3・4前		2		○				1					隔年開講		
	ドイツ文学講義2	3・4前		2		○				1					隔年開講		
	越境するアジアの文化1	3・4前		2		○				1					隔年開講		
	越境するアジアの文化2	3・4前		2		○								兼1	隔年開講		
	現代朝鮮半島事情	1・2・3・4後		2		○				1							
	世界の宗教と文化	2・3・4後		2		○				2		1			兼2 オムニバス		
	西洋史講義1	2・3・4前		2		○									兼1		
	西洋史講義2	2・3・4後		2		○									兼1		
	フランス文学講義1	3・4後		2		○				1					隔年開講		
	フランス文学講義2	3・4後		2		○				1					隔年開講		
	京都の歴史と文化	1・2・3・4前		2		○									兼1		
	グローバル・ボランティア論	1前		2		○									兼1		
	国際関係論1	3・4前		2		○									兼1		
	国際関係論2	3・4後		2		○									兼1		
	キリスト教学1	1・2・3・4前		2		○									兼1		
	キリスト教学2	1・2・3・4後		2		○									兼1		
	小計(45科目)		—	0	90	0	—	—	—	5	5	1	0	0	兼19		
	実践研究	A	英語基礎演習 a	1前	2			○			1					兼5	
			英語基礎演習 b	1後	2			○			1					兼5	
		B	実践文化演習 a (フィールドラーニング)	2後		2			○							兼1	集中
			実践文化演習 b (語学集中 ドイツ語)	2後		2			○							兼1	集中
			実践文化演習 c (語学集中 フランス語)	2後		2			○							兼1	集中
			実践文化演習 d (語学集中 中国語)	2後		2			○							兼1	集中
実践文化演習 e (語学集中 韓国・朝鮮語)			2後		2			○		1						集中	
実践文化演習 f (カナダ語学研修)			2後		4			○		1	3					集中	
実践文化演習 g (中国語学研修1)			2後		4			○							兼1	集中	
実践文化演習 h (中国語学研修2)			2後		4			○		1						集中	
実践文化演習 i (韓国語学研修)			2後		4			○		1						集中	
実践文化演習 j (ヨーロッパ文化研修)			2後		2			○		1	1					集中	
実践文化演習 k (インド文化研修)			2後		2			○							兼1	集中	
実践文化演習 l (中国文化研修)			2後		2			○							兼1	集中	
English Workshop & Camp			2・3前		2			○			1						

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(国際学部 国際文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
学 科 専 門 科 目	B	English Workshop 2		2			○			1					
		English Workshop 3	2・3・4前	2			○		1						
		English Workshop 4	2・3・4後	2			○			1					
	C	Pop Culture in English 1	2・3前		2			○			1				
		Pop Culture in English 2	2・3後		2			○			1				
		World News	2・3前		2			○							兼1
		Global Communication	2・3後		2			○							兼1
		Teaching English to Children 1	2・3前		2			○							兼1
		Teaching English to Children 2	2・3後		2			○							兼1
		言語文化演習 (英語) 1	3・4前		2			○							兼2
		言語文化演習 (英語) 2	3・4後		2			○							兼2
		言語文化演習 (ドイツ語) 1	3・4前		2			○							兼1
		言語文化演習 (ドイツ語) 2	3・4後		2			○							兼1
		言語文化演習 (フランス語) 1	3・4前		2			○		1					
		言語文化演習 (フランス語) 2	3・4後		2			○		1					
		言語文化演習 (中国語) 1	3・4前		2			○							兼1
		言語文化演習 (中国語) 2	3・4後		2			○							兼1
		言語文化演習 (韓国・朝鮮語) 1	3・4前		2			○							兼1
		言語文化演習 (韓国・朝鮮語) 2	3・4後		2			○							兼1
		表現文化演習1	2・3・4前		2			○							兼1
表現文化演習2	2・3・4後		2			○							兼1		
西洋史文献を読む1	2・3・4前		2			○							兼1		
西洋史文献を読む2	2・3・4後		2			○							兼1		
小計 (38科目)		—	4	80	0	—			4	5	0	0	0	兼19	
卒業研究	卒業研究	4通	8				○		5	5					
小計 (1科目)		—	8	0	0	—			5	5					
現 代 総 合 科 目	キ ャ リ ア 形 成 系 科 目	キャリアデザイン概論1	1・2・3・4前	2			○							兼1	
		キャリアデザイン概論2	1・2・3・4後	2			○							兼1	
		キャリアデザイン実践1	2・3・4後	2			○							兼1	
		キャリアデザイン実践2	3・4前	2			○							兼1	
		インターンシップ1 大学コンソ京都	2・3後	2				○		1				集中	
		インターンシップ2 大谷大学	1・2・3・4後	2				○						兼1 集中	
		フィールドワーク特殊演習 (PBL)	1・2・3・4後	2				○						兼1	
		思考法入門	1・2・3・4後	2				○						兼1	
		日本国憲法1	1・2・3・4前	2				○						兼1	
		日本国憲法2	1・2・3・4後	2				○						兼1	
		日本国憲法3	1・2・3・4前	2				○						兼1	
		青年と社会教育	2・3・4前	2				○						兼1	
		社会福祉と社会教育	2・3・4後	2				○						兼1	
		ポルトガル語圏のくらしと言葉1	1・2・3・4前	2				○						兼1	
		ポルトガル語圏のくらしと言葉2	1・2・3・4後	2				○						兼1	
		情報メディアと社会	1・2・3・4前	2				○						兼1	
		ワード・プロセッシング入門	1・2・3・4前	2					○					兼1	
		ワード・プロセッシング応用	1・2・3・4後	2					○					兼1	
		PC利用による表計算入門	1・2・3・4前	2					○					兼1	
		PC利用による表計算応用	1・2・3・4後	2					○					兼1	
		PC利用によるプレゼンテーション	1・2・3・4後	2					○					兼1	
		PC利用によるレポート・論文技法	1・2・3・4前	2					○					兼1	
画像処理入門	1・2・3・4前	2					○					兼1			
画像処理応用	1・2・3・4後	2					○					兼1			
PCミュージック入門	1・2・3・4前	2					○					兼1			



## 教 育 課 程 等 の 概 要

(国際学部 国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
キャリア形成系科目	PCミュージック応用	1・2・3・4後		2				○								兼1
	Webサイト構築入門	1・2・3・4前		2				○								兼1
	Webサイト構築応用	1・2・3・4後		2				○								兼1
	日本語表現(入門)1	1・2前		2				○								兼1
	日本語表現(入門)2	1・2後		2				○								兼1
	日本語表現(実践)	2・3・4前		2				○		1						兼1
	発想から表現へ	1・2・3・4後		2				○								兼1
小計(32科目)		—	0	64	0	—			1	1	0	0	0		兼14	
現代総合科目 自然生命系科目	自然と生物の科学	1・2・3・4後		2				○								兼1
	地震と火山1	1・2・3・4前		2				○								兼1
	地震と火山2	1・2・3・4後		2				○								兼1
	地球科学1	1・2・3・4前		2				○								兼1
	地球科学2	1・2・3・4後		2				○								兼1
	惑星科学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	地球環境と生命の共進化	1・2・3・4後		2				○								兼1
	生命のしくみと多様性	1・2・3・4前		2				○								兼1
	化石の科学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	星の世界	1・2・3・4後		2				○								兼1
	こころの科学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	人間理解の心理学	1・2・3・4後		2				○								兼1
	人間関係の心理学1	1・2・3・4前		2				○								兼1
	人間関係の心理学2	1・2・3・4後		2				○								兼1
	コミュニケーションの心理学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	健康心理学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	心理療法概論	2・3・4前		2				○								兼1
	心理療法と教育	2・3・4後		2				○								兼1
	行動の科学1	1・2・3・4前		2				○								兼1
	行動の科学2	1・2・3・4後		2				○								兼1
	脳とこころ	1・2・3・4前		2				○								兼1
	カウンセリング	2・3・4後		2				○								兼1
	障害者・病者と共に生きる	1・2・3・4前		2				○								兼1
	スポーツと健康の科学1	1・2・3・4前		2				○								兼1
	スポーツと健康の科学2	1・2・3・4後		2				○								兼1
	人間関係と身体表現	1・2・3・4前		2				○								兼1
	生涯スポーツ・レクリエーション活動	1・2・3・4前		2				○								兼1
	障害者スポーツ論	1・2・3・4後		2				○								兼1
	スポーツ研究演習I	2・3・4前		2					○							兼1
	スポーツ研究演習II	2・3・4後		2					○							兼1
	障害者スポーツ研究演習I	2・3・4前		2					○							兼1
	障害者スポーツ研究演習II	2・3・4後		2					○							兼1
	身体活動I	1・2・3・4前		1						○						兼2
身体活動II	1・2・3・4後		1						○						兼2	
身体活動I(障害者スポーツ)	1・2・3・4前		1						○						兼1	
身体活動II(障害者スポーツ)	1・2・3・4後		1						○						兼1	
小計(36科目)		—	0	68	0	—			0	0	0	0	0		兼19	
歴史文化系科目	ドイツの歴史と文学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	中国の歴史と文学	1・2・3・4前		2				○								兼1
	現代東南アジア事情	1・2・3・4後		2				○								兼1
	漢字の世界	1・2・3・4後		2				○								兼1

## 教 育 課 程 等 の 概 要

(国際学部 国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
現代総合科目 歴史文化系科目	近代日本とアジア	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	古都の歴史と文化	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	教育学1	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	教育学2	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	ドイツの言語文化	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	ドイツの民衆文化	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	フランスの言語文化	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	フランスの民衆文化	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	中国の言語文化	1・2・3・4前		2		○			1						兼1	
	中国の民衆文化	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	チベットを見た日本人たち	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	朝鮮半島の美術	1・2・3・4前		2		○			1						兼1	
	東南アジアの宗教文化	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	インドの神々	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	東アジアの宗教文化	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	仏教と美術	1・2・3・4後		2		○									兼1 集中	
	人と文化	2・3・4後		2		○									兼1	
	人と宗教	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	芸術表現	1・2・3・4前		2			○								兼1	
	ブッダに学ぶ	1・2・3・4前		2		○									兼1 集中	
	親鸞に学ぶ	1・2・3・4後		2		○									兼1 集中	
	仏教福祉論	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	部落差別と大谷派教団1	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	部落差別と大谷派教団2	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	部落差別と浄土真宗1	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	部落差別と浄土真宗2	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	部落史論1	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	部落史論2	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	反カースト運動論	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	アイヌ民族と共に	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	アジア侵略と宗教	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	非戦の系譜	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	小計 (36科目)		—	0	72	0	—	—	—	2	0	0	0	0	0	兼26
	合計 ( 291 科目)		—	44	482	0	—	—	—	5	5	1	0	0	0	兼120
	学位又は称号		学士			学位又は学科の分野			文学関係							
	卒業要件及び履修方法						授業期間等									
<p><b>&lt;英語コミュニケーション履修コース&gt;</b></p> <p>①共通基礎科目30単位以上（人間学Ⅰ・Ⅱ8単位、大学導入科目2単位、必修外国語Ⅰ8単位、必修外国語Ⅱ4単位、選択外国語8単位以上）を履修。</p> <p>※必修外国語Ⅰについては、英語Ⅰ（4単位）、ドイツ語Ⅰ、フランス語Ⅰ、中国語Ⅰ、韓国・朝鮮語Ⅰの中から研究テーマや興味関心から導かれる地域の外国語を4単位選択し履修する</p> <p>※必修外国語Ⅱについては、英語Ⅱ、ドイツ語Ⅱ、フランス語Ⅱ、中国語Ⅱ、韓国・朝鮮語Ⅱの中から研究テーマや興味関心から導かれる地域の外国語（4単位）を選択し履修する</p> <p>※選択外国語については、中・上級の外国語学習を行うためのための科目や、第三外国語の修得を目指す学生のための科目を配置し、学生の興味・関心により8単位以上を履修する</p> <p>②学科専門科目70単位以上（演習16単位、概論4単位、講義18単位以上、実践研究[A]4単位、実践研究[B]12単位以上、実践研究[C]8単位以上、卒業研究8単位）を履修。</p>						1 学年の学期区分			2期							

## 教 育 課 程 等 の 概 要

(国際学部 国際文化学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	
<p><b>&lt;欧米文化・アジア文化履修コース&gt;</b>                      ①共通基礎科目24単位以上（人間学Ⅰ・Ⅱ8単位、大学導入科目2単位、必修外国語Ⅰ8単位、必修外国語Ⅱ4単位、選択外国語2単位以上）を履修。                      ※必修外国語Ⅰについては、英語Ⅰ（4単位）、ドイツ語Ⅰ、フランス語Ⅰ、中国語Ⅰ、韓国・朝鮮語Ⅰの中から研究テーマや興味関心から導かれる地域の外国語を4単位選択し履修する                      ※必修外国語Ⅱについては、英語Ⅱ、ドイツ語Ⅱ、フランス語Ⅱ、中国語Ⅱ、韓国・朝鮮語Ⅱの中から研究テーマや興味関心から導かれる地域の外国語（4単位）を選択し履修する                      ※選択外国語については、中・上級の外国語学習を行うためのための科目や、第三外国語の修得を目指す学生のための科目を配置し、学生の興味・関心により2単位以上を履修する                      ②学科専門科目66単位以上（演習16単位、概論4単位、講義26単位以上、実践研究[A]4単位、実践研究[B]2単位以上、実践研究[C]6単位以上、卒業研究8単位）を履修。</p>													1 学期の授業期間	15週
<p><b>&lt;英語コミュニケーション履修コース、欧米文化・アジア文化履修コース共通&gt;</b>                      ③現代総合科目12単位以上（キャリア形成系、自然生命系、歴史文化系から各4単位以上を修得）                      ④自己選択科目は、他学部・他学科の「学科専門科目」を履修した単位、および他大学等において修得した単位について自己選択科目として認定する</p> <p>①～④について、指導教員の履修指導のもと、幅広く学習し、124単位以上を履修する                      *履修科目の登録単位数の上限は、半期24単位、年間48単位まで</p>													1 時限の授業時間	90分

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。



授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部 国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目 総合科目	人間学I	本講義では、大谷大学に学ぶ私たち自身の問題を考えるための土台を形成することを目的とする。前期では、釈尊伝をもとに仏教の思想が照らし出す人間のあり方から、自分自身の生き方を考え学んでいく。時には、仏教以外の哲学や思想、現代の社会問題にも触れながら、授業を進めていく。また、人間学の重要なテーマとして人権問題学習を行う。後期では、前期の学習を引き継ぎつつ、親鸞の生涯と思想を通して、自己や人間について考え学ぶ。また親鸞の思想以外の広いテーマを取り上げることで、現代を生きる人間の具体的な問題について考える視点を学んでいく。	
	人間学II	仏教は現代社会の諸問題とどのように関わるべきであろうか。この問題を考えるうえで、世界各地で注目されている「エンゲイジド・ブディズム」（現代社会の諸問題に積極的に関わるることによって自己の信仰を深めようとする仏教運動）が参考になるとと思われる。この講義ではエンゲイジド・ブディズムを手掛かりに、仏教と社会の問題を考える。	
	人間学II	今から500年あまり前、戦国乱世の中をたくましく生き抜いたのが蓮如である。その根底には親鸞の教えがあった。明日をも知れない命を生きている人々に、蓮如は「後生の一大事」を心にかけることを呼びかけている。私たちににとって本当の一大事とは何なのだろうか、蓮如の生涯と言葉を通して学んでいく。	
	人間学II	本学には、正門と北門に伝道掲示板が設置されている。そこには「きょうのことば」（月ごとに変わるので今月の言葉でもある）が掲示されている。真宗、仏教のほか様々な専門分野から、学生たちに触れて欲しい言葉が選ばれ掲示されると共に、その言葉の解説文も作成されている。この授業では、過去に掲示された「きょうのことば」を取り上げ、その言葉が生まれた背景や意味を学ぶことを通して、私たち人間の課題を考察していく。また、受講生には「きょうのことば」の解説文の作成を求める。	
	人間学II	宗教は、人が「人として生きること」と深く関係している。本授業は、そうした宗教の意味について考察することを目的とする。また「近代化」は人間のものの見方を根底から変えることとなり、その結果、宗教の有り様も大きく変化することとなった。近代とはどのような時代なのか、そしてそこにおいて生じた「新たな宗教」はどのような特徴を有しているのか、といった問題をも取り上げる。	
	人間学II	映画を鑑賞し、その含意を哲学的思考によって検討する。哲学的思考とは、世界の中で起こる具体的な問題について、その具体性をいったん取り除いた後に残る抽象的な枠組をその問題の本質として捉えようとする試みである。ともするとその抽象性ゆえに難解で浮世ばなれした印象を持たれることもある哲学であるが、その抽象性の目的は、この世界の問題を正確に考えるためのものであり、その問題への答えがいつでもどこでも誰にでも当てはまるようにするためなのである。ここでは、様々な哲学者の著作に学びつつ、私たちがいま抱えている悩み、映画の中で出会った疑問について考えていく。	
	人間学II	平安時代初期に著わされた仏教説話集『日本国現報善悪霊異記』の読解を通じて、説話・物語の意義を考察する。授業では導入として、『日本霊異記』と景戒についての概略に触れ、説話・物語のはたらきについて学習する。以後は、鶯の育て児、雷を捕らえる、異類婚姻、蟹の報恩、仏法の迫害など、仏教に関する異聞・奇伝・霊験を描いた短編各篇や、霊験譚、蘇生譚、放生譚、化牛譚、現世業火譚、貧者得幸譚、奇譚と因果、仏法意識などを取り上げていく。	
	人間学II	障害のある者と障害のない者が共に心豊かに生きる「共生社会」の実現が求められている。本講義では、障害のある子どもの発達と彼らの歩みを支える家庭や地域の状況や発達支援の取り組みを事例を通して学ぶことにより、現代社会に生きる人間としての在り様について考える機会とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目 総合科目	人間学Ⅱ	紀行文学や映像作品などを通して、人がどのように旅をしてきたか、そしてその人々が何を心得、世界にどのような影響を及ぼしてきたのかについて紹介する。同時に、世界各国の問題、文化、人々について、時事的な事柄や、講師自身の旅の経験を通じて、旅の魅力やその重要性、可能性を広く論じる。	
	人間学Ⅱ	地球温暖化問題やごみ問題など、現在の環境問題は人の生活様式、社会システムそのものに原因があり、これを解決していくには、市民一人ひとりの意識と行動が変わっていくことが必要である。本演習では、行政や企業、住民組織、NPO等による環境問題の解決に向けた取り組みを学習するとともに、野外イベントや祇園祭での環境対策活動（ゴミ削減）に参加し、その経験をレポートにまとめることで理解を深める。	
	人間学Ⅱ	テキストを通して、釈尊の生涯と教えに「人間とは何か」を学び、生きるとはどのようなことかについて、自己として考えていく。また、そのことを通じて、自己と他者への理解を深めながら、主体的にさまざまな問題解決に取り組むことができる態度を身につけることを目指す。具体的には、各回で指定したテキストの該当部分を事前に読解し、授業での担当者からの解説と問題提起を受け、受講者によるディスカッション及びレポートの作成により進めていく。	
	人間学Ⅱ	思想の伝播を人物から見る。「シルクロード」と通称される通商路を通じて行われた東西交流は、単に文物の遣り取りだけにとどまらず、思想的な交流をも促した。インドから中国へと伝えられた仏教は、その思想的交流の中心となったものである。この授業では、思想交流を担った何人かの仏教者がどのような生涯を送ったか確認していく作業を通して、その生きざまを感じ取ることを目標とする。「シルクロード」は広大な地域にわたる交易路であり、その文化的背景も様々である。それらを理解するためには、言語資料のみならず映像資料を参照することが大いに助けになる。しかしながら、授業中には映像資料を参照する十分な時間的余裕はないと予想される。NHKの『シルクロード』（本学図書館AV資料室 請求記号[P1/000001/]）などを、時間をつくって鑑賞しておくことが望ましい。	
	人間学Ⅱ	本学初代学長である清沢満之の言葉を通して、その思想と宗教的信念に私たち一人ひとりの生き方を学ぶ。清沢満之とはどのような人物かということについて、基本的な事柄を学び、清沢満之の言葉を通し、人生において「本当に問題とすべきことは何か」について思索する力を身につける。また、真宗大学と清沢満之との関係について学び、大谷大学で学ぶ私たちに願われていることを学ぶ。	
	人間学Ⅱ	釈尊の生涯と教えについて、主に仏伝經典（『過去現在因果経』）を読みながら考える。仏伝經典という概念、仏伝經典に説かれていることを正しく理解し、仏伝經典に説かれた釈尊の生涯の中心を説明できるようにすることを旨とする。	
	人間学Ⅱ	宗教的・思想的な営為のなかに〈自然〉がどのように織り込まれているのかに着目する。精神文化と自然環境との繋がりを理解することになる。自然観・環境観を学ぶことを通じて、人間社会をとりまく自然環境に関する知見を深める。そして、我々のあり方を根本的に見つめ、いかに社会や文化の発展に貢献することができるか考えることになる。	
	人間学Ⅱ	宗教都市京都の歴史、都市の空間構造、都市としての特色を理解した上で、京都の寺社を中核に成立・展開した門前町について、その歴史・景観・文化を理解する。さらに現代の門前町における地域社会としての現状・住人・商いについてみていく。その上で門前町の街づくりについて考えてみたい。	
	人間学Ⅱ	障害のある者と障害のない者が共に心豊かに生きる「共生社会」の実現がわが国で求められており、そのためには、生活する誰もが互いに人格や個性を尊重し、他者の多様なあり方を認め合える全員参加型の社会を形成していくが必要になる。本講義では、「障害者の権利に関する条約」「障害者差別解消法」「インクルーシブ教育」など共生社会に関連する基礎的な内容や地域での様々な取り組みについて学び、自身の体験を発表することにより現代社会に生きる人間としての在り様について考える機会とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
総合科目	人間学Ⅱ	日本列島は地質学的に環太平洋造山帯という変動帯に位置する。したがって、日本の大地は地質災害に見舞われやすいという宿命を背負っている。これまで私たち日本人はそのような大地の上で暮らしてきたし、独自の文化を花開かせた。しかし、当たり前とも思えるそのような事実について、実際に巨大地震・津波を体験しないと、どのような問題が生じるか分からなかった。本講義では私たち日本人が変動する大地とともに生きて来た証しを、先人の築いた文化事象から読み解き、これからの日本の進むべき方向について考えていきたい。		
	人間学Ⅱ	保育や子育ての現場では、日々たくさんの絵本が用いられている。その絵本を読む対象の年齢や発達を考慮して選書し、またそれを声に出して読むことで、読み手と聞き手の間に深い信頼関係が生まれるのではないかと考える。本講義では、毎回4, 5冊の絵本を課題として取り上げ、その絵本の構造や物語の意味を確認することで、より実践的に絵本を理解する視点を学ぶ。またそれぞれの現場で絵本を用いることを考え、参加する学生が実際に自分で選んだ絵本を読み語る時間を設定し、互いに意見を出し合い研鑽する機会を持つ。また、人権が描かれた絵本を取り上げ、大人と子供が人権という課題を共有し、個々の生活の中で発展させる筋道を探る。そのために、絵本の構造、メッセージ性、芸術性を把握し、絵本の可能性を受講者全員で考える。		
	人間学Ⅱ	テキストを通して、釈尊の生涯と教えに「人間とは何か」を学び、生きるとはどのようなことかについて、自己として考えていく。また、そのことを通じて、自己と他者への理解を深めながら、主体的にさまざまな問題解決に取り組むことができる態度を身につけることを目指す。具体的には、各回で指定したテキストの該当部分を事前に読解し、授業での担当者からの解説と問題提起を受け、受講者によるディスカッション及びレポートの作成により進めていく。		
	人間学Ⅱ	コミュニケーションは、社会生活を営む上で私たちがお互いを理解し結び付けるための大切な伝達である。人は、お互いに意志、考えを交換し、人間関係を築き、広げ、豊かに作り上げる。本講義では、そのようなコミュニケーションの支援を必要とする障害者、特に聴覚障害者とコミュニケーションの諸問題を中心に取り上げる。聴覚障害者にとってはコミュニケーション保障は基本的人権の保障なのである。聴覚障害者への無関心・無理解からコミュニケーションの障壁は作られやすく、人との関わり合いや社会参加におおきな制約を受けることとなる。聴覚障害者の理解とそのコミュニケーション手段の手話ということばについて学ぶ。		
共通基礎科目	大学導入	この授業の目的は、大学で学ぶための基礎（「読む」「論理的に考える」「書く」「伝え・表現する」力）をアクティブラーニングを通して身につけることである。具体的には、図書館や情報教室などの学内施設の活用方法や専門の学びの基礎となるレポートの作成法を学ぶ。資料を読みまとめる方法、自分の意見を整理するためのブレインストーミングでアイデアを広げる方法、論理的な文章を書く方法をレポートを作成することで学ぶ。また、他者とのブレインストーミングやレポートの公表を受けることで、自分以外の他者の視点を知り、自らの学びを自己評価する。		
	必修外国語	英語Ⅰ	この授業では、英語4技能（読み・書く・聞く・話す）の基礎（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベル）の修得をめざす。具体的には、英語圏の人びととコミュニケーションをおこなうのに最低限必要な発音と文法を理解し、それを実際に運用できるようになることをめざす。こうした言語能力を涵養する一方で、知的好奇心と異文化理解への関心を喚起すべく、視聴覚教材などを使用して英語圏の文化的事象を紹介する。	
		ドイツ語Ⅰ	この授業では、ドイツ語の4技能（読み・書く・聞く・話す）の基礎（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベル）の修得をめざす。具体的には、ドイツ語圏の人びととコミュニケーションをおこなうのに最低限必要な発音と文法を理解し、それを実際に運用できるようになることをめざす。こうした言語能力を涵養する一方で、知的好奇心と異文化理解への関心を喚起すべく、視聴覚教材などを使用してドイツ語圏の文化的事象を紹介する。	
フランス語Ⅰ		この授業では、フランス語の4技能（読み・書く・聞く・話す）の基礎（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベル）の修得をめざす。具体的には、フランス語圏の人びととコミュニケーションをおこなうのに最低限必要な発音と文法を理解し、それを実際に運用できるようになることをめざす。こうした言語能力を涵養する一方で、知的好奇心と異文化理解への関心を喚起すべく、視聴覚教材などを使用してフランス語圏の文化的事象を紹介する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通基礎科目	必修外国語	中国語Ⅰ	この授業では、まず中国語の発音を練習し、基礎的な文法を学ぶ。具体的には、中国語の発音記号であるピンインを学習し、くりかえし発音の練習をおこなう。つぎに文法事項を段階的に学び、簡単な会話や短い表現を修得する。授業は日本人教員とネイティブ教員が分担することで、基礎的な文型を身につけると同時に、正しい発音で簡単な会話が出来るようにする。 言語能力を高めると同時に、視聴覚教材をも使用し中国文化について学ぶ。なお、本学への留学生にも協力を要請し、学生にネイティブと中国語会話および文化交流の機会を提供する。中国語検定試験や中国語語学研修の企画にもリンクさせることで、学ぶ楽しさとモチベーションの向上を図る。	
		韓国・朝鮮語Ⅰ	ハングル文字のしくみと発音を学習すると同時に簡単な日常会話などの習得をめざす。基本的にはハングル検定5級取得を目指すレベルの教科書に準拠して、 <b>해</b> 体の習得と過去形までを習得する。映像資料やCDを通じて言葉が使われている背景についても理解を深め、実践面にも重点を置く。教科書で基本文法を学ぶと同時に、発音練習、リーディング、会話練習などの発話に力をいれ、「ペアワーク」を取り入れることで、相手を前にした会話は単に文法だけではなくコミュニケーションの姿勢そのものが大切であるということを学んでいく。	
		英語Ⅱ	「英語Ⅰ」で修得した知識を基礎にして、初級から中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）への橋渡しをおこなう。具体的には、英語の発音と文法を十分に理解し、日常会話のレベルを越えて、各人の意見を交換するためのコミュニケーション力・読解力を身につける。こうした言語能力を涵養する一方で、知的好奇心と異文化理解への関心を喚起すべく、視聴覚教材などを使用して英語圏の文化的事象を紹介する。	
		ドイツ語Ⅱ	「ドイツ語Ⅰ」で修得した知識を基礎にして、初級から中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）への橋渡しをおこなう。具体的には、ドイツ語の発音と文法を十分に理解し、日常会話のレベルを越えて、各人の意見を交換するためのコミュニケーション力・読解力を身につける。こうした言語能力を涵養する一方で、知的好奇心と異文化理解への関心を喚起すべく、視聴覚教材などを使用してドイツ語圏の文化的事象を紹介する。	
		フランス語Ⅱ	「フランス語Ⅰ」で修得した知識を基礎にして、初級から中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）への橋渡しをおこなう。具体的には、フランス語の発音と文法を十分に理解し、日常会話のレベルを越えて、各人の意見を交換するためのコミュニケーション力・読解力を身につける。こうした言語能力を涵養する一方で、知的好奇心と異文化理解への関心を喚起すべく、視聴覚教材などを使用してフランス語圏の文化的事象を紹介する。	
		中国語Ⅱ	この授業では中国へ旅行した場合に必ず使用する表現や言いまわしを習得する。中国語に慣れてもらうため授業中での指示や説明も中国語で行う。また、中国語の短文の音読練習を徹底して反復するだけでなく、小テストを利用したヒアリング練習をベースにした授業を展開するのでヒアリング能力を大きく向上させることができる。各学生の努力も関係するが、前期の授業の終了時には中国語検定準4級のヒアリングの問題に挑戦できる能力を身につけ、後期終了時には中国語検定4級のヒアリングの問題に挑戦できる力を身につけることを目標とする。	
	韓国・朝鮮語Ⅱ	ハングル検定4級をめざすレベルの教科書をもとに、韓国・朝鮮語を習得する。各時制の連体形、接続詞などを学び、重文と複文が作れることを目指す。このレベルでは自ら辞書をひいて短い文章を読解することが可能になってくるので、実際に現地で使われている文章を読んでいく。会話については、日常よくつかわれる決まり文句などを身につけていき、自然なやりとりをするための知識を習得する。語学学習のみならず、文化的な背景なども学習する。		
選択外国語	英語読解（中級）1・2・3・4	中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）の英語が読めるようになることをめざす。文法項目別の練習問題の演習を通して基本的な英文法を再確認した上で、その知識を活用し、文や段落の構造を理解して、家族やキャンパスライフといった生活の中の身近な話題や文化・社会に関するエッセイ、英語学習者向けに編集された時事英語など、まとまった量の英文の要点を把握し、正確に読みこなすことができるようになる。		



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目 選択外国語	英作文（中級） 1・2	中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）の英語が書けるようになることをめざす。基本的な英文法を確認し、ボキャブラリーを増やしながら、自分の考えを断片的に書くのではなく、パラグラフとしてのまとまりと一貫性をもった文章を英語で書くにはどうすればよいかを学んでいく。英語による文章の基本的な構成を確認し、原因と結果の提示や、説明文、比較対照など、様々な論述のパターンを学習し、それを利用してまとまった文章を英語で書けるようになることを目指す。	
	英文法（中級） 1・2	基本的な英語の文法事項を確認し、それを踏まえて、さらに上のレベルの英文法をマスターする。中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）の様々な分野の題材を扱う英語の長文を正確に読みこなし、正しい英語で文章をまとめる上で必要となる文法的知識と応用力を身につけることを目指す。授業では、テキストのほかにプリントも併用し、英文法の諸項目を一つずつ講義しながら、徹底した問題演習によって知識の定着をはかる。	
	英語のしくみと表現（中級） 1・2	コンピュータやインターネットを利用して、基本的な英語の文法を理解し、書くこと・読むことの習得を中心に、総合的な英語力を養う。オリジナルの英語学習ソフトを利用して、基本的な文法・構文を理解する練習をおこなったうえで、テキストを用いてインターネット上にある情報の理解や発信に必要な英語能力を養う練習をする。半期ごとの最後に、PowerPointを使ったプレゼンテーションによって、半期間の活動のまとめを行なう。基礎的な語彙・文法の知識、及び聴解力を養い、平易な会話が理解できるようになる。また、英文の構造に対する理解を深め、短いパラグラフ（200語程度）が書けるようになる。	
	英語会話（中級） 1・2・3・4・5・6	中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）の英語が話せるようになることをめざす。会話に必要な基本的なボキャブラリーを確認し、英語の4技能を統合的に活用する活動に取り組みながら、道案内や買い物・レストランでの注文、電話の応答といった旅行や仕事で用いる基本的な会話表現を習得し、身近な日常生活にかかわることについて情報交換をしたり、将来つきたい仕事など自分のことについて話したり、興味をもっているトピックについて自分の考えを述べるようになる。	
	英語読解（上級） 1・2・3・4	上級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのB2レベル以上）の英語が読めるようになることをめざす。文章の論理的な構造を理解して、文学作品や論説文など、自分の専門分野にかかわる文章や、思索的・抽象的な話題、emailなどのビジネスで使用される文書、英字新聞に掲載された社会・文化にかかわる話題など、長い文章の要点を、目的に応じて正確に読みこなし、文章で取り上げられた話題に関する自らの考えを構築することができるようになる。	
	英語会話（上級） 1・2・3・4	上級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのB2レベル以上）の英語が話せるようになることをめざす。ボキャブラリーを増強し、英語の4技能を統合的に活用する活動に取り組みながら、自分の専門分野、社会や文化に関する事柄など幅広い話題について調べたことを英語でプレゼンテーションを行い、自分の考えを述べられるようになる。ディスカッションやディベートにおいては、批判的思考力をもって自分の意見を述べ、他者のことばに耳を傾け、発展的な議論ができるようになる。建設的で高度な英語コミュニケーション能力を向上させることを目的とする。	
	英作文（上級） 1・2	上級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのB2レベル以上）の英語が書けるようになることをめざす。英文法を理解し、パラグラフライティングのスキルを身につけ、論理的に展開した文章を書く演習を行っていく。日常生活に関することや自分の専門分野、社会や文化に関する事柄、時事問題など幅広い話題に関して、批判的思考力をもって構築した自らの考えについて、まとまった文章を英語で書くことができるようになる。	
	英文法（上級） 1・2	英語の基本的な文法知識を再度確認した上で、認知言語学や生成文法、統語論といった言語学的アプローチの基本を理解し、それをふまえた一歩進んだ英文法を学んでいく。テキストは英語の基本についての説明からなるが、これを上級向けにアレンジして説明や練習を加え、適切な状況下で適切な英語が使えるような能力増強を目指す。英語の文の組み立てに対する理解をベースとして情報の仕組みや意味を考慮するなど、より広い視野からの英文法理解を目指す。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目 選択外国語	インテンシブ英会話（中級） 1・2	英語ネイティブ教員が週4回の授業を集中的に行い、「話す」「聞く」ことに焦点をあてつつ、「読む」「聞く」「話す」「書く」力を総合的に伸ばして全員が中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）に到達し、上級レベル（CEFRのB1レベル以上）を目指していく。授業では必要なボキャブラリーを増強しつつ、日常生活から社会問題まで幅広い話題について、批判的思考力をもって自分の考えを英語で書いたり話したりし、双方向の議論ができるようになることを目指す。留学や仕事に対応できる高度な英語コミュニケーション能力を身につけていく。	
	ドイツ語読解（初級） 1・2	この授業では、基本的なドイツ語文法を確認し、それを活かして初級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベル）のドイツ語が読めるようになることをめざす。具体的には、文法の知識がけっして断片的なものではなく、それがいかに文章の読解に役立つものであるかを理解する。そのうえで最終的には、文法の知識を活かして辞書を使用することができ、辞書さえあれば基本的なドイツ語文が読めるようになることをめざす。	
	ドイツ語会話（初級） 1・2	この授業では、会話や文法のヨーロッパ共通基準（CEFR）A1.1レベルのドイツ語能力を身につけることを目的とする。ドイツ語のコミュニケーション力をつける授業として、リスニングと会話練習に重点を置く。ペアワークでの対話をくり返ししながら表現を覚え、基本的な文法規則を応用できるようになるのが目標である。ゲームやクイズを通して語彙を増やし、楽しく簡単なドイツ語会話を学ぶ。また言語だけではなく、ドイツの生活や文化についてビデオ等を使って紹介する。	
	ドイツ語のしくみと表現（初級） 1・2	この授業は、ドイツ語既修者だけでなく、はじめてドイツ語を学ぶ人のためのものである。ここではドイツ語の基礎知識の習得をめざす。想定されるレベルは、ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベルである。具体的には、次のようなステップで、ドイツ語のしくみを学ぶ。1. 予備知識なしで、ドイツ語のしくみを自分で発見する。2. その発見を補足するために、「聞く」「読む」「書く」「話す」のに必要な基礎知識を解説する。3. 練習問題をとおして、知識の確認をおこなう。	
	ドイツ語読解（中級） 1・2	基本的なドイツ語文法を確認し、それを活かして中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）のドイツ語が読めるようになることをめざす。具体的には、これまでに修得した文法の知識がけっして断片的なものではなく、いかに文章の読解に役立つものであるかを理解する。最終的には各文の構造（とりわけ主文と副文の区別）を自身で分析し、それをふまえて中級レベルのドイツ語文が読めるようになることをめざす。	
	フランス語読解（初級）	この授業では、基本的なフランス語文法を確認し、それを活かして初級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベル）のフランス語が読めるようになることをめざす。具体的には、文法の知識がけっして断片的なものではなく、それがいかに文章の読解に役立つものであるかを理解する。そのうえで最終的には、文法の知識を活かして辞書を使用することができ、辞書さえあれば基本的なフランス語文が読めるようになることをめざす。	
	フランス語会話（初級）	この授業では、会話や文法のヨーロッパ共通基準（CEFR）A1.1レベルのフランス語能力を身につけることを目的とする。フランス語のコミュニケーション力をつける授業として、リスニングと会話練習に重点を置く。ペアワークでの対話をくり返ししながら表現を覚え、基本的な文法規則を応用できるようになるのが目標である。自己紹介や相手への質問などを通じて簡単なフランス語会話を学ぶ。また言語だけではなく、フランスの生活や文化についてビデオ等を使って紹介する。	
	フランス語読解（中級）	基本的なフランス語文法を確認し、それを活かして中級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA2-B1レベル）のフランス語が読めるようになることをめざす。具体的には、これまでに修得した文法の知識がけっして断片的なものではなく、いかに文章の読解に役立つものであるかを理解する。最終的には各文の構造（とりわけ主節と従属節の区別）を自身で分析し、それをふまえて中級レベルのフランス語の文章が読めるようになることをめざす。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目 選択外国語	フランス語会話（中級）	この授業では、会話や文法のヨーロッパ共通基準（CEFR）A2レベルのフランス語能力を身につけることを目的とする。フランス語のコミュニケーション力をつける授業として、会話練習に重点を置く。ペアワークでの対話をくり返しながら表現を覚え、基本的な文法規則を応用してフランス語で基本的な質疑応答ができるようになることが目標である。また言語だけではなく、フランス社会における生活やコミュニケーションについてビデオ等を使って紹介する。	
	フランス語のしくみと表現（初級）	この授業は、フランス語既修者だけでなく、はじめてフランス語を学ぶ人のためのものである。ここではフランス語の基礎知識の習得をめざす。想定されるレベルは、ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベルである。具体的には、次のようなステップで、フランス語のしくみを学ぶ。1. 例文や会話を参照し、フランス語のしくみを自分で発見する。2. その発見を補足するために、「聞く」「読む」「書く」「話す」上で必要な基礎知識を解説する。3. 練習問題をとおして、知識の確認をおこなう。	
	フランス語のしくみと表現（中級）	この授業では、主にフランス語で「書く」「話す」表現の練習を通じて、フランス語文法の理解を深め応用力を伸ばすことを目的とする。ヨーロッパ共通基準（CEFR）ではA2-B1レベルに相当するところを目指す。そのため、授業では和仏・和仏の辞書を使いながら、いくつかのテーマにそって身の回りの事象をフランス語で表現できるよう練習を繰り返し、フランス語による表現力を養う。あわせて、既習のフランス語の基本文法と基本語彙の定着もはかる。	
	中国語読解（初級） 1・2	はじめて中国語を学ぶ学生、または基礎からやりなおしたい受講生が、着実な中国語読解力を身につけることを目標として授業をおこなう。授業は、新出単語の紹介、教科書の音読、文法要点の説明、本文解説、練習問題と進む。また各課終了ごとに確認の小テストを行う。短文読解を通じた文法理解に基づいて、初歩的な文法を身につけること、さらに、そこから中国語でコミュニケーションするための「読み、書き、聴き、話す」基礎力をつけることを到達目標とする。	
	中国語会話（初級） 1・2・3・4	はじめて中国語を学ぶ受講生、または基礎からやりなおしたい受講生が、基礎的な中国語会話の能力を身につけることを目標として授業をおこなう。そのため、中国語の発音を紹介しながら、単語の発音と会話によって発音の基礎を身につけることと、中国語の基本文型を習得し、会話練習や練習問題の確認によって基礎文法を学ぶことを重視し、自己紹介や大学案内、家族の紹介、観光旅行など身近なテーマについての会話文をもとに練習する。	
	中国語のしくみと表現（初級） 1・2	はじめて中国語を学ぶ受講生、または基礎からやりなおしたい受講生が、あいさつや日常会話など、場面に応じた常用表現をもちいた基本構文の表現法と文法とを身につけることを目標として授業をおこなう。授業では、まず発音の基礎から学び、自己紹介や相手への質問の仕方などをテーマに、新出単語の紹介、教科書の音読、文法要点の説明、本文解説、練習問題へと進む。中国語の基礎的な日常表現と基本文法を身につける。音読や作文も出来るようになることを到達目標とする。	
	中国語会話（中級） 1・2	中国語初級会話を履修した受講生が、基本的な中国語会話の能力を身につけることを目標として授業をおこなう。そのため、中国語初級会話で習った基礎文法を整理して復習するとともに、基本的な中国語会話力を習得するために様々な練習を行う。電話のかけ方、出迎への挨拶、両替の勘定、交通機関の利用や料理の注文など、日常生活に根差した会話文をもとに表現や発音を練習し、中国語検定試験4級以上に合格できる力をつけることを目指す。	
	中国語会話（上級） 1・2	この授業では、読解、作文、会話、リスニングなど中国語の力を総合的に向上させ、中級から上級への高度な中国語運用能力の習得が主な目的である。教室ではiPad等を活用し、中国語圏で撮影した動画や写真を用いながら生きた言語と文化を学ぶほか、留学生を教室に引き、質疑応答やディスカッションを行うこともある。そうした活動を通じて、複雑な中国語文法を身につけると同時に、高度な長文の翻訳ができるようになること、また、中国語の基礎を固めながら中国文化を理解することも目指していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通基礎科目	選択外国語	韓国・朝鮮語会話（初級） 1・2	韓国・朝鮮語を学ぶことを通じて、朝鮮半島と日本との深いかわりを知る。学習目標としては、語学力の習得はもちろんのこと、歴史・文化・経済・社会などについてもたえずふれ、語学を学んで何を語るのがかということを常に考えさせる授業とする。基本的には初級なので単文を中心とした会話習得を目指し、決まり文句や現在ネイティブスピーカーがどのような発話をしているのかも聴取し、音とリズム、イントネーションに親しむことにも重点をおいていく。	
		韓国・朝鮮語のしくみと表現（初級）1・2	初級程度の文法の習得を中心に教科書にしたがって授業をすすめていく。ただし文法、読解、聴解、会話の力はバランスよく伸ばしていく必要があるため、学んだ内容が実際にどのように活かされるのかを確認させつつ、段階的に学習していく。語学力の定着には反復練習が欠かせないが、受講者がモチベーションを維持できるよう工夫しながら指導する。韓国・朝鮮語が欧米の言語とはことなり、日本語との親和性が極めて高いことから、日本語ネイティブにとって学んで使える外国語であるということを理解させる。	
		韓国・朝鮮語読解（中級）	この授業では韓国・朝鮮語の初級で学んだ事柄を復習しながら、韓国語の知識と運用能力をさらに高めていく。中級レベルの文法事項に対応した読解や音読・聞き取り練習を行う。後期には前期に続いてテキストに沿って進めるが、マンガや広告、新聞記事などのさまざまなジャンルの読み物も読むこともある。単語力のアップのために毎回単語テスト（聞き取り方式）を行う。	
		韓国・朝鮮語会話（中級）	韓国・朝鮮語の応用（中級）を学習しながら、南北朝鮮の文化、歴史、社会、政治などにも幅広く触れていく。レベルとしては重文と複文を駆使した自然な会話を目指す。授業は基礎を確認しながら、教科書に沿って進め、暗記、作文、聞き取り、日常及び専門分野の会話を応用的に学習して行く。担当者による一方的な講義は避け、受講生参加型の授業を行う。	
		韓国・朝鮮語読解（上級）	この授業では、韓国・朝鮮語の中級で学んだ文法・語彙・表現などを復習しながら、韓国・朝鮮語の知識と運用能力をさらに高めてゆく。読解のテキストに沿って授業を進めるが、マンガや広告、新聞記事などを読むことで、実際に現地で使われている表現や言い回しにも積極的に接していく。また、単語力を鍛えるために、毎回聞き取り方式による単語テストをおこなう。	
		現代チベット語	現代口語を中心としたチベット語入門。チベット語には数多くの方言があるが、その中でも本授業では、アムド・チベット語（アムド方言）を取り扱う。アムド・チベット語の発音に慣れ、自然な言い回しを使い、自己紹介や、買い物・食事の注文などの状況における簡単な日常会話ができるようになることを目的としている。そのために、授業では発音練習やドリル（ミニ会話）を繰り返すとともに、音声や映像などの視聴覚教材を用い、五感の全てを通じてアムド・チベット語を「身に着ける」ようにする。また随時、インターネットを利用して、現地のアムド・チベット人と直接話し交流する機会を設ける。言語は異文化への入り口である。すこしでも言葉を話すことができれば、アムド・チベットの人たちはあたたかく迎え入れてくれる。彼／彼女たちとの距離も、ぐっと近くなる。この授業がアムド・チベットの言語のみならず、文化への入り口となればと考える。	
		ラテン語入門1・2	基礎的なラテン語文法を習得する。ラテン語は古代ローマ帝国の公用語であり、ヨーロッパでは中世から近世初めまで、宗教や学問の分野において重要な役割を果たした言葉である。ラテン語で記された古典の中には現代語に翻訳されて読めるものも多いが、ラテン語の原文で読んでこそ、現代の私たちも古典の深遠な豊かさに触れることができる。この授業では、ラテン語文法を基礎から丁寧に学び、ラテン語短文の和訳ができるようになることを目指す。	
		ヒンディー語	ヒンディー語の初級文法を身に付ける。ヒンディー語で読み書きおよび会話ができるように授業を進める。特に、ネイティブの会話内容を理解し、自分を簡単に表現できるようにする。参考書や配布資料とともに、インドの Bollywood 映画や歌、絵本等も教材として用いて授業を進める。本授業の学習到達目標は(1)ヒンディー語の基礎知識を身につけること、(2)文章の読み書きができること、(3)簡単な日常会話が話せること、(4)簡単な日常会話が聞き取れるようになること、(5)言語を通して異文化理解を深めることである。	
学科専門科目	演習	国際文化演習 I a	本演習では、教員の話題提供をもとに、グローバル時代における多文化共生とは何かを考え、他者を理解しようとする開かれた知的態度を養う。また、資料の読解や要約、文献情報収集といった、大学での学びに必要なスタディスキルを身につける練習もおこなう。25人程度の小規模クラス編成で、ホームルーム的機能も担う授業であり、担当教員は指導教員として、学部および学科の学びの方向性と全体像を伝える一方で、個々の学生に応じた履修相談・指導をおこなう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科専門科目	演習	国際文化演習 I b	「国際文化演習 I a」に引き続き、知的関心を身の回りから世界へと拡げるため、国際文化研究に必要な基本概念やキーワードを、具体的な地域文化研究の事例から学ぶ。また、スタディスキルを身につけるため、個人で取り組む課題の他にペアワークやグループワークも取り入れ、資料の収集、引用の仕方、レポートの書き方、レジユメの作り方、プレゼンテーションの仕方などを練習する。受講生が各自のテーマに沿った文化研究の結果を口頭で発表し、書式の整ったレポートにまとめられることが第1学年の達成目標である。担当教員は指導教員として、第2学年以降のコース選択に関する指導や助言もおこなう。	
		国際文化演習 II a	演習 II においては、選択したコースに応じて、基本知識や概念を学ぶためのテキスト講読とともに、文化事象や時事問題に関する資料の読解、視聴覚資料の閲覧、教員の話提供などを出発点として、ディスカッションやグループワークでの調査・発表などをおこなう相互交流型のゼミ形式をとる。ゼミによっては教室外での調査や活動を伴う。そうした教室内外での活動を通じて、受講生は自らの関心を広げつつ、テーマに基づいて資料を集める力、自分の意見を明確に伝える力、他人の意見を受け止めて考える力を身につける。	
		国際文化演習 II b	「国際文化演習 II a」に引き続き、相互交流するゼミ形式のクラスで国際文化研究に必要な知識を身につけ、与えられたテーマや関心のあるテーマに関して口頭でも文章でも自分の意見をわかりやすく伝える力を養う。この時期から、受講生が自分自身の関心のありかを見定めることが重要になってくる。そのため、担当教員は指導教員として、個々の学生の学修状況を見守り、必要に応じて、関心の喚起や資料の紹介などの助言・指導をおこなう。口頭発表やレポート執筆のスキルに加え、第3学年以降の研究につながるテーマ設定と研究計画を作成できることが第2学年の達成目標である。	
		国際文化演習 III a	演習 III においては、受講生の主体的な学びを支える演習を通じて、自ら問いを立て、情報を集めて考察・検証し、答えを導き出す力を養うため、担当教員はゼミ運営の主導的役割を徐々に受講生に譲りながら、サポーター役や助言者としての役割を強めていく。受講生は他の受講生や教員の助言を受けながら、各自の関心に応じた研究や調査をおこない、その成果を全員の前で分かりやすく報告する。報告を受けた後は全体で議論し、講評や問題点の指摘、さらなる研究のための助言や意見交換をおこなう。	
		国際文化演習 III b	「国際文化演習 III a」に引き続き、受講生が各自の研究テーマ・研究計画を深化させるための発表と議論をおこなう。演習の主役は受講生であり、教員はできるだけサポーター役に回る。発表を聞いた受講生は、内容は無論のこと、わかりやすく説得力のある形で発表ができていのかどうかもチェックし、発表者にフィードバックする。こうした相互検証を通じて、国際文化研究の計画的な遂行力と、その成果を共有するためのコミュニケーション能力を身につける。	
		国際文化演習 IV a	本演習では、4年間の学びの集大成となる卒業論文あるいは卒業研究の完成を目指す受講生が主役であり、教員はそのサポーターに徹する。教員は、受講生が各自の関心に応じて立てた問いの射程や妥当性、仮説の妥当性、資料や情報の集め方、論点の整理や論理展開などについて適宜助言をおこなう。受講生は研究の進捗や調査の成果を全員の前で分かりやすく報告し、それを受けた他の受講生は積極的にコメントや質問、助言やアイデアを出すことにより、質の高い卒業論文・卒業研究の完成に貢献する。	
		国際文化演習 IV b	「国際文化演習 IV a」に引き続き、受講生の研究実践の経過および成果発表と意見交換をゼミ形式でおこなう。また、研究計画の修正や調査・文献収集に関する助言等もおこなう。これらの作業を通して、文化事象を多角的に捉えた上で自分の問いを設定する力、そこから独自の理解や課題の発見・共有へとつなげていく総合的な発想力や論理的思考力を養う。各自の成果表現については、表現形式の論理的妥当性の観点からも助言指導をおこない、受講生が自分の見解を論理的に表現する能力が身につくようにする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 概論	国際文化概論 1・2	<p>この授業は複数名の教員によるリレー式講義形式で、世界の文化の多様性と文化研究の多様な観点を理解することが目的である。英米、ドイツ、フランス、中国、韓国・朝鮮に関するそれぞれの研究分野について2回ずつ授業をおこなう。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(調書番号2) 喜多恵美子/2回 朝鮮半島の歴史を概観するとともに、衣食住など生活文化の特徴を素描する。</p> <p>(調書番号6) 石本哲子/2回 アメリカの文化・文学について、アメリカン・ドリームとアメリカン・ゴシックをキーワードに概説する。</p> <p>(調書番号11) 麻生陽子/2回(2021~2023年度) ドイツの歴史と民族について、移民問題や集団的記憶という観点から論じる。</p> <p>(調書番号9) 廣川智貴/2回(2024年度は4回) 初回は授業のオリエンテーション、ならびに国際文化研究の基本概念と方法について講義する。また、15回目には学習の評価と講評をおこなう。(2024年度:2回の授業でドイツにおいて歴史が文化や芸術と取り結ぶ関係について具体例を挙げながら論じる。)</p> <p>(調書番号2) 浅若裕彦/2回 イギリスにおける階級と言語の関係や食文化について、イギリスの歴史を踏まえながら論じる。</p> <p>(調書番号1) 藤田義孝/3回 フランス文化のローカル性とグローバル性について、食文化や生活文化を例に論じる。14回目に講義全体のまとめをおこない、比較文化の手法や発想を解説する。</p> <p>(調書番号4) 李青/2回 文化交流の空間としての中国を概観し、生活文化や食文化の多様性について論じる。</p>	オムニバス方式
	国際言語概論 1・2	<p>この授業は6名の教員によるリレー式講義形式で、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語についての概要を学ぶことで、世界で話される言語の広がり多様性に気づき、語学の最低限の知識を身につけることで多言語状況への対応力を高めることを目指す。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(調書番号7) Ryan W. Smithers/1回(+2回) カナダ英語の特徴と、英語教授法や母語習得、第二言語習得に関する知見の概要を紹介する。</p> <p>(調書番号8) 西川幸余/1回(+2回) 世界語としての英語の広がり、アメリカ英語とイギリス英語の特徴と概要を紹介する。</p> <p>(調書番号5) 渡部 洋/2回(+2回) 中国語圏の広がり、発音や文法の特徴、辞書の使い方、学習の方法などを紹介する。</p> <p>(調書番号1) 藤田義孝/5回(+2回) 初回のイントロダクションでは言語政策や多言語主義について論じる。それから2回の授業で、フランス語圏の広がり、発音や文法の特徴、辞書の使い方、学習の方法などを紹介する。14回目に授業全体を総括し、15回目に学習評価と講評をおこなう</p> <p>(調書番号9) 廣川智貴/5回(+2回) ドイツ語圏の広がり、発音や文法の特徴、辞書の使い方、学習の方法などを紹介する。</p> <p>(調書番号3) 喜多恵美子/2回 韓国・朝鮮語の広がり、発音や文法の特徴、辞書の使い方、学習の方法などを紹介する。</p> <p>(Ryan W. Smithers・西川幸余・渡部 洋・藤田義孝・廣川智貴/2回)(共同) 12~13回目には専任教員全員で第2学年以降のコース選択に関わるガイダンスと学習相談をおこなう。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	比較文化講義 1	<p>この授業では複数の教員による講義とグループ活動を取り入れ、英語を「母語としての英語」と「国際語としての英語」の二側面から捉え理解を深めることが目的である。英語圏における英語とその文化的・社会的背景について学び、留学生とのディスカッションや外国人観光客へのアンケート調査を行い、調査結果をグループでプレゼンテーションする。 (オムニバス方式15回)</p> <p>(調書番号8) 西川幸余 / 12回 初回授業でオリエンテーションと、世界の中の英語に関する概要を講義する。6回目はオーストラリアの英語教育に関する講義を行う。6回目は、アジア諸国での英語の役割について解説する。7回目は「日本人と英語」についてグループ・ディスカッションを行う。8回目は世界の文化の多様性について比較文化の観点から論じる。9回目は「国際語としての英語」について留学生とディスカッションを実施する。10回目は国際語としての英語の役割に関するアンケートをグループで作成、11回目にアンケート調査、プレゼンテーションの準備を行う。異文化コミュニケーションに焦点をあて、12回目に(1)母語としての英語の場合と、13回目に(2)国際語としての英語の場合について講義する。14回目はアンケート調査結果についてのグループ・プレゼンテーションを行う。15回目は授業全体を総括し、グループ・ワーク相互評価、意見交換を行う。</p> <p>(調書番号2) 浅若裕彦 / 1回 イギリスの文化と社会と、イギリスの歴史を踏まえながら論じる。 (調書番号10) 三浦誉史加 / 1回 アメリカにおけるイギリスの文化の影響について概要を紹介する。 (調書番号7) Ryan W. Smithers / 1回 カナダの文化と社会について、カナダの歴史を踏まえながら論じる。</p>	オムニバス方式
学科専門科目	講義 比較文化講義 2	<p>この授業では複数の教員による講義とグループ活動を取り入れ、日本文化の特質や世界の多様な文化について学び比較考察する。国際語としての英語を介してコミュニケーションをとる上での課題について考えを深めることが目的である。留学生とのディスカッションや外国人観光客へのアンケート調査を通して異文化理解を深め、調査結果をグループでプレゼンテーションする。 (オムニバス方式15回)</p> <p>(調書番号8) 西川幸余 / 10回 初回授業でオリエンテーションと、文化について「あらわな文化」と「かくれた文化」を例に論じる。2回目に異文化間コミュニケーションに関する現状と課題について講義する。4回目に国際語としての英語と英語圏以外の文化とのかかわりについて、グループ・ディスカッションを行う。8回目にお互いの文化について留学生とディスカッションを行う。非言語コミュニケーションから見た世界の文化の多様性について、9回目は対物・動作・接触に焦点をあて講義し、10回目に近接・時間・音調の観点から論じる。11回目に異文化間コミュニケーションに関するアンケートをグループで作成、12回目にアンケート調査、プレゼンテーションの準備を行う。14回目にアンケート調査結果についてのグループ・プレゼンテーションを行う。15回目に授業全体を総括し、グループ・ワーク相互評価、意見交換を行う。</p> <p>(調書番号2) 浅若裕彦 / 2回 3回目は英語圏の英語と文化のかかわりについて論じる。5回目は「甘え」とことばについて、イギリス・アメリカ社会と日本社会の比較を例に論じる。 (調書番号7) Ryan W. Smithers / 2回 実社会における異文化理解について、6回目に高コンテクスト文化と低コンテクスト文化の観点から論じ、7回目に「ことばは文化である」という認識のもと意味順の活用法を紹介する。 (調書番号10) 三浦誉史加 / 1回 言語と文化的認識について、サピアとウォーフの仮説と翻訳の可能性という観点から論じる。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科専門科目	講義	英米の文化 1	本科目の目的は、文学を通してイギリスの文化と社会の理解を深めることである。喜劇・歴史劇・悲劇・ロマンスという4つの主な演劇ジャンルに基づいて文化の構造を考察していく。前期は喜劇と歴史劇を取り扱う。前者はとりわけ求愛と結婚を含む『夏の夜の夢』に焦点をあて、喜劇と因習・社会との関係を考察しながら喜劇の構造を分析する。後者は『リチャード3世』に触れ、16世紀から20世紀にかけて共通する歴史的・政治的テーマを追い、現代の時事問題との関連性について議論しながら作品理解を進める。本科目の終わりまでに受講者は西洋演劇のジャンルを概観でき、ジャンルの学習を通して言語と文化を理解し、文学の形式について説明できるようになることを目指す。	
		英米の文化 2	本科目の目的は、文学を通してイギリスの文化と社会の理解を深めることである。講義では、演劇の伝統に基づいて文化の構造を考察していく。後期では悲劇とロマンスという2つの演劇ジャンルを中心に取り上げる。前者は後者はヨーロッパ文化における悲劇の役割を定義しつつ『マクベス』に焦点をあてる。後者は『テンペスト』に触れ、問題劇ならぬ「問題のある」ジャンルとしてのロマンスを考察していく。本科目の終わりまでに受講者はジャンルの学習を通して言語と文化を理解し、イングランドの演劇の伝統について説明できるようになることを目指す。	
		英米の文化 3	各回の授業を通して、アメリカの歴史を追いながら、文化、文学、ポピュラー・カルチャー等に現れる女性像がどのようなものであるのか、具体的な作品に触れながら考察する。また、そのようなアメリカ女性像と、女性作家の作品に現れる女性像とを比較考察する。前期はアメリカがヨーロッパ諸国の植民地であった時代の植民地における女性の生活から、フラッパーと呼ばれた女性たちが作り出したファッション文化が影響を与えた1920年代までを取り扱う。	
		英米の文化 4	各回の授業を通して、アメリカの歴史を追いながら、文化、文学、ポピュラー・カルチャー等に現れる女性像がどのようなものであるのか、具体的な作品に触れながら考察する。また、そのようなアメリカ女性像と、女性作家の作品に現れる女性像とを比較考察する。後期は第二次世界大戦における女性の労働から、「書き」「歌い」「撮る」現代女性作家にいたるまで多角的な視点で取り上げる。	
		英米の文化 5	この授業はカナダの歴史と文化と社会の理解を深めることである。「英米の文化5」において、英語と日本語の両方を用いたディスカッションを行います。英語力を身につけ、自国の文化と同時にカナダの文化について理解を深めることで、国際人として成長してもらうことを目標とし、他の国際人たちと内容のある対話ができるように成長してもらいたいと考えている。	
		英米の文化 6	教授法、母語習得、第二言語習得、学習者要因、コミュニケーション能力などの英語や言語に対する理解を深めます。「英米の文化6」において、英語と日本語の両方を用いたディスカッションを行います。英語力を身につけ、第二言語修得論と同時に言語能力について理解を深めることで、第二言語を獲得するプロセスとして成長してもらうことを目標とし、他の人たちと内容のある対話ができるように成長してもらいたいと考えている。	
		英語学概論 1	英語が現在置かれている状況を共時的視点から概観するとともに、英語がどのような言語であるのか、主に音声面の特徴（音韻論）について講義する。世界語としての英語の広がりをおさえた後、イギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語の特徴を論じ、さらにビジンやクレオールといった変種も取り扱う。また、音韻論については、発音のしくみや、母音・子音の様々な種類について講じる。本講義を通じて、受講者が英語という言語の広がりや音韻論的特徴を説明できるようになることを目指す。	
		英語学概論 2	英語がたどってきた変化を通時的視点から概観し、今ある英語の形にいたった経緯について講義する。ブリテン島上陸以前の時代から説き起こし、ノルマン征服までの古期英語、そこから15世紀までの中期英語、それ以降の近代英語の成立と形成について、それぞれの時代背景、発音・文法・語彙などを解説する。本講義を通じて、単一不変の「英語」は実在しないことを受講者が理解し、英語がこれまでたどってきた大まかな歴史的变化を説明できるようになることを目指す。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	英語のしくみ1	ことばはヒトの思考や認知、コミュニケーションに重要な役割を果たす。ヒトの生得的な言語習得能力（自然科学的アプローチ）と実際にことばを社会で使う際に必要な条件（社会学的アプローチ）の区別の必要性を理解し、双方のアプローチから、ことばがどのようにその機能を果たすのかを考え、その基盤となる「しくみ」を具体的に英語を例にとって考える。特に英語の時制、助動詞の機能について学び、疑問文、否定文に関連するしくみを理解する。	
	英語のしくみ2	ことばはヒトの思考や認知、コミュニケーションに重要な役割を果たす。言語によるコミュニケーションには脳内の情報・意味を「外」に出し、情報の受け手に届けなければならない。通常の言語によるコミュニケーションには「音声」が使われる。この授業では特に英語を中心に、音声がどのような仕組みで作られ、どのような構造を持ち、またどのようにして使われるのかを学ぶ。音声の物理的特性と心理的特性の違いを理解することで、英語のしくみを理解しながら、同時に英語学習の際のキーポイントをおさえていく。	
	ヨーロッパの文化1	この授業ではおもにドイツ語圏の文化を取りあつかう。文化といっても多種多様であるが、ここではおもに文学からドイツの文化に焦点をあてる。例えば、実在の人物でありながら、生前すでに伝説上の人物ともなったファウストを取り上げることが考えられる。ファウストは、西ヨーロッパでは伝記、小説、戯曲、映画あるいはオペラの題材ともなっている。こうしたモチーフを取り上げることで、文学のみならず、諸芸術をとおしてヨーロッパの文化を深く理解することをめざす。	
	ヨーロッパの文化2	この授業ではヨーロッパの主要国であるフランスを手がかりに西欧文化を探るため、フランスの社会や文化について総合的に学び、ヨーロッパ文化の理解を深めつつ、日本文化を見つめ直す機会となることを目指す。講義においては、フランスの歴史・社会・政治・産業・食文化など幅広いテーマが扱われるが、受講生の関心や質問にできるだけ応えていくため、内容は多少変更になる可能性がある。受講生には、現在の「ヨーロッパの文化」と考えられているものとは何か、フランスを通してその源泉を探ろうとする姿勢が求められる。	
	東アジアの文化1	この授業では、東アジア、特に漢字文化圏における文化の諸相を、具体的な例を通して把握することを目指す。東アジアには、広範な地域とそこに暮らす多くの民族が育んできた多様な文化が存在するが、そうした中から幾つかのテーマを選び、グループで調査し、発表を行うこととする。取り上げるテーマは、東アジアの地理的・歴史的特徴、文化と自然の関わり、食文化、見立ての文化、音楽（楽器）の伝播、陸の道と海の路、などである。	
	東アジアの文化2	日本との歴史的関係が最も深くて近い、朝鮮半島の歴史と文化について学ぶ。古代から近現代にいたるまでの幅広い枠の中で、朝鮮半島に関する知識を増やし理解を深めることが、東アジアの平和につながるということも理解させる。最近の韓流ブームの影響もあって、日本では韓国にのみ関心がむけられがちであるが、この授業ではできるだけ南北双方に関するトピックをとりあげる。知っているようで知らない朝鮮半島の文化を学ぶことで、受講者の思考力を鍛える。	
	日本ポップカルチャー論	本講義の目的は、日本ポップカルチャーの全体像と特徴を理解することである。そのため、ポップカルチャーとは何かという概論に始まり、歴史的視点から平安時代にまでさかのぼって日本ポップカルチャーの起源を論じる。その後、鎌倉時代から江戸時代、明治・大正・昭和期の民衆文化を取り上げつつ、戦後からバブル期、ゼロ年代から現在にいたるポップカルチャーの系譜を論じる。受講生が授業で紹介された作品や書籍を自分の眼で確かめ、日本ポップカルチャーの状況と変遷を、時間的・空間的に広い視野から説明できるようになることを目指す。	
	国際文化特殊講義1	この授業では、ドイツ語圏の思想家を手がかりに、表象文化について考察する。例えば、そうした思想家として、ヴァルター・ベンヤミンを挙げることができる。彼の写真論「写真小史」（1931）、また映画論ともいえる論考「技術的に複製が可能になった時代の芸術作品」（「複製技術時代の芸術作品」1936）などを手がかりにして、写真とは何か、映画とは何か、さらに映像文化とは何かを考えることができる。講義で得た知見は、われわれの時代における表象文化とは何なのかという思索へと受講者を誘うだろう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	国際文化特殊講義 2	フランスで発展した記号論的分析、精神分析的な分析の考え方についてわかりやすく説明する。具体的には、ソシュールの言語学やフロイトやラカンの精神分析理論を「夢分析」などを紹介しながら解説していく。その際、理論を説明するため、できるだけ受講生の関心に応じた映画作品や絵画作品などを取り上げて分析する。講義を通じて、受講生が物語や映画作品を「記号論」や「精神分析学」の方法で自分なりに分析できることを目指す。	
	国際文化特殊講義 3	19世紀末、リュミエールの発明した映写機が世界に普及発展し、その後撮られた映像や映画が蓄積される。現代ではそうした映像や映画で近代に生きる人たちの営みや出来事を見ることができる。本講義ではそうした19世紀末からの映像や映画を使って今後の国際社会に生きていく学生といっしょに100年と少し前の人類の過去を検討し、近代史や映画史について知ってもらうだけでなく、過去の人類のやってきたことに対して考察を試みてもらおうと思う。狙いは映像と映画を通して19世紀終わりから20世紀前半までの世界の近代史の中の人類の失敗と成功を考察し、現代の複雑多岐で不透明な国際社会において正しい見極めや判断のできる力を身につけることにある。また、授業の達成目標としては欧米の近代史と中国の近代史のかかわりを理解した上で世界の近代史の流れや知識を習得することである。	
	国際文化特殊講義 4	第二次大戦後、1945年～1953年の朝鮮現代史を講義する。本講義は朝鮮 (Korea) をめぐる国内的観点と国際的観点を縦横に駆使しながら、立体的に朝鮮現代史を講義する。具体的には、(1) 対日戦後処理をめぐる国際協定と朝鮮問題、(2) 朝鮮国内の脱植民地化と民衆の動き、(3) 国際連合と朝鮮問題との関わり、(4) 内戦から国際戦争への拡大、(5) 朝鮮の法的地位について国際法学者 (入江啓四郎、横田喜三郎) による定義と解釈がテーマとなる。	
	国際文化特殊講義 5	インド世界に関わる際に常識として具えておくべき、思想史上の基本的事項を概観する。授業では、ヴェーダの宗教、ブラフマニズム、神秘思想、初期仏教・ジャイナ教、大乘仏教、バガヴァッドギーター、ヒンドゥー教、六派哲学から中世以降の状況まで幅広く取り扱う。受講生がインド思想の基本的事項を時系列に沿って理解するとともに、「仏教国」であるはずの日本に暮らす我々が、なぜインド思想に疎いのかを考察する端緒を得ることが本講義の目的である。	
	国際文化特殊講義 6	本授業は「華人社会の歴史と文化—アジアを中心に」をテーマとする。中国大陸・台湾・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア、インドネシア、タイなど日本の華人などを中心とした華人社会について、その歴史背景、生活の有り様について、資料に基づき考察する。まずは、華僑の歴史から日本における華僑の実態を検討しつつ、東南アジア華僑について、越境者、移民、多文化混在、異文化理解の要素を意識しながら、担当者が講義をする。受講者も中華街や中華学校での実地調査および関連資料の収集をおこない、プレゼンテーションする。本授業を通じて華人社会の文化に親しみ、理解を深めることを目指す。	
	アメリカ文学講義 1	当授業では、アメリカを代表する文学者の作品の考察を行う。中心となる作品を指定し、主要キーワードを設定して講読を進めていく。原文にふれ、かつ先行論文を参照することで、それぞれの作品の解釈を試みる。また、作品が生み出された歴史的社会的背景を考察していく。講読を通じて、作家の特性、ひいてはアメリカ文学について知る手がかりとする。現在私たちが生きている世界について考えを深めるきっかけともしたい。当授業において、受講生は原文にふれることで英語読解の力を身につけ、作品を解釈する技術を身につけることができる。	
	アメリカ文学講義 2	当授業では、「アメリカ文学講義 1」で得たアメリカ文学・文化や社会についての知識、作品解釈の技術といった学修成果を踏まえた上で、更に発展的に、アメリカを代表する文学者の作品について学んでいく。中心となる作品を指定し、主要キーワードを設定して講読を進めていく。原文にふれ、かつ先行論文を参照することで、それぞれの作品の解釈を試みる。また、作品が生み出された歴史的社会的背景を考察していく。講読を通じて、作家の特性、ひいてはアメリカ文学について知る手がかりとする。現在私たちが生きている世界について考えを深めるきっかけともしたい。当授業において、受講生は原文にふれることで英語読解の力を身につけ、作品を解釈する技術を身につけることができる。	
	イギリス文学講義 1	この授業では、イギリスを代表する小説家ジェイン・オースティンの代表作である、『高慢と偏見』、『マンズフィールド・パーク』、『エマ』の3作品を取り上げる。それぞれの作品について、原典に基づいて制作された映像作品を参考にしながら鑑賞し、作品が執筆された19世紀初頭の様々な社会状況に目を配りつつ、その作品世界や作品に描かれた人物像について考察する。また、オースティンが用いた先駆的な小説技法についても考察する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	イギリス文学講義 2	この授業では、19世紀のイギリスを代表する小説家チャールズ・ディケンズの作品の中で、評価の高い『デイヴィッド・コパフィールド』、『クリスマス・キャロル』、『大いなる遺産』の3作品を取り上げる。執筆当時のヴィクトリア朝時代の様々な社会状況について解説し、原典に基づいて制作された映像作品も参考にしながら、テキストの重要場面を抜粋して読み、作品に描かれている人物像やディケンズが作品に込めた意味について考察する。	
	英文学概論 1	英文学史の基本的な流れを理解する授業である。前期は、中英語を用いて物語を書いた最初の文人とも言われるチャプマンの『カンタベリー物語』から19世紀の小説までを触れる。詩や演劇などのジャンル、詩の形式などにかかわる文学専門用語を確認しつつ、各時代区分に代表的な英文学作品を取り上げ、作品や作者の特徴を理解する。作品が製作された時代・社会的背景を解説し、作品に反映された、その時代の価値観を考察する力を身につける。授業内では受講生がミニエッセイなどを書いて作品解釈に取り組み活動を取り入れ、作品について自分の考えを持つ力を身につける。	
	英文学概論 2	英文学史の基本的な流れを理解する授業である。後期は、大英帝国の最盛期であるヴィクトリア朝の作家ディケンズの『オリヴァー・ツイスト』から、第二次世界大戦後の作品群までを触れる。文学専門用語を確認しつつ、各時代区分に代表的な英文学作品を取り上げ、作品や作者の特徴を理解する。作品が製作された時代・社会的背景を解説し、作品に反映された、その時代の価値観を考察する力を身につける。授業内では受講生がミニエッセイなどを書いて作品解釈に取り組み活動を取り入れ、作品について自分の考えを持つ力を身につける。	
	ドイツ文学講義 1・2	この授業では、近代のドイツ文学をあつかう。具体的には、現代の基礎を築いたとされる18世紀から20世紀までのドイツ文学を、さまざまなモチーフという観点から考察する。必要に応じて、作品分析の方法、時代背景、文学史上のキーワードなどを解説する。本講義の最終目的は、授業内容をふまえて、受講者自身が考えることである。そのため、期末にはレポートを課し、受講者の到達度を確認する。それはまた受講者にとって、近代ドイツ文学が現代のわれわれにとってどのような意味があるのかを考えるきっかけになるはずである。	
	越境するアジアの文化 1	本講義では近現代の東アジアに広がっている華人社会を中心としつつ、日本、朝鮮半島との関わりも視野に入れ、東アジアにおける近現代の文化の種々相を考える。授業の前半は中国の近代の幕開けである1840年のアヘン戦争から、日清戦争、日露戦争などを軸にして、戦争が東アジアに与えた影響を考える。後半部分は中国の風俗習慣、宗教、大衆文化などを重点に置き、異文化の観点から東アジアの華人の活躍も取り上げる。PPT形式をもって映像を交えながら講義する。	
	越境するアジアの文化 2	本講義では、ここ数年東アジアの中心的話題となっている朝鮮半島情勢を理解するための基礎知識を獲得することを目的とする。前半では、朝鮮民主主義人民共和国をテーマの中心に置き、同国と諸外国および南北朝鮮関係と文化交流を扱う。後半では、韓国現代史と韓国文化（およびその伝播力）をテーマとし、主に文化の側面を学ぶ。授業では、現在進行形的情勢そのものを扱うのではなく、情勢の基層にある現代史に目を向けそれを学ぶことで、現在の情勢を深く理解するための基礎力を養う。受講者の理解を助けるため、パワーポイントや映像教材などを使用する。	
	現代朝鮮半島事情	朝鮮半島の時事問題を契機とし、なぜこのような問題がおこっているのかについて、近現代の史実と関連付けて講義する。現代の問題も扱いながら、近代期から現代までの朝鮮半島の歴史と文化を概観することで、朝鮮半島をめぐる事象への理解を深めることが本講義の目的である。授業では、日本の報道資料だけではなく大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国の報道資料、映像資料や音響資料などを提示しながら、各国間における報道内容の差異に注目し、一つの問題を多角的に考察することで、受講生が現代の朝鮮半島をめぐる問題に対する理解を深めつつ多角的な視点を獲得することを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目 講義	世界の宗教と文化	<p>この授業は5名の教員およびゲストスピーカーによるリレー講義形式で、受講生が世界の多様な文化と宗教の関わりを理解し、世界における宗教の広がり、各地域における宗教と文化の関わりを説明できるようになることを目指す。 (オムニバス方式/全15回)</p> <p>(調書番号1) 藤田義孝/5回 最初の2回は、宗教学を専門とするゲストスピーカーを招き、宗教とは何かという問いを踏まえて世界の宗教を概観する。それからフランスのカトリックについて2回にわたって論じる。最後の1回は授業全体のまとめであり、世界の宗教と文化の関わりを総括する。</p> <p>(調書番号2) 浅若裕彦/2回 イギリス国教会の歴史を講じ、イギリスの生活文化に根差した宗教のあり方を考察する。</p> <p>(調書番号11) 麻生陽子/2回 ドイツにおける生活文化や芸術作品に宗教がどのような影響を与えてきたのか、宗教改革やプロテスタントの歴史を踏まえて論じる。</p> <p>(調書番号30) DASH SHOBHA/3回 インドの宗教を理解するため、バラモン教、ヒンドゥー教、ジャイナ教、および仏教の成立とその思想について概観する。</p> <p>(調書番号22) 三宅伸一郎/3回 チベット仏教史を概観し、仏教がチベットの生活文化や食文化とどのような関係を取り結んでいるかを論じる。土着信仰と仏教の関係についても、日本と比較しながら考察する。</p>	オムニバス方式
	西洋史講義 1・2	<p>アメリカ合衆国の歴史を、＜多様性と統一性＞の視点を意識して、世界史における位置づけを確かめながら学ぶ。アメリカ合衆国成立前の先住アメリカ人(ネイティブ・アメリカン)の歴史、イギリスはじめヨーロッパ勢力による植民地化、諸植民地の発展、イギリスからの独立戦争とアメリカ合衆国の誕生、アメリカの経済発展の基盤ともなった大西洋奴隷貿易と合法化された奴隷制度、南北戦争などに焦点を当てる。さらには、再建期から20世紀の動き、第一次世界大戦から第一次世界大戦を経て、公民権運動、冷戦、冷戦後の「グローバリズム」など現在の諸課題まで歴史的考察を行う。日本に住む私たちに大きな影響を与え続けている日米関係についても学ぶ</p>	
	フランス文学講義 1・2	<p>この授業では、フランスにおける文学と歴史の関わりを理解するため、中世から20世紀までのフランスにおける主な歴史的事象と文学の関わりを概観し、いくつかの作品を要約や抜粋の形で紹介しながら、時代背景との関連や文学史上のキーワードを解説する。また、文学作品分析の論述に慣れるため、期末までにミニ・レポート執筆および添削を行う。それによって、受講者がフランス文学の作品を歴史的背景と関連づけて論じることができるようになることを目指す。</p>	
	京都の歴史と文化	<p>京菓子は平安時代にまでつながる文化の所産であり、日本独自の食べ物に発展し今に伝わり生活に生き続けている。授業を通してお菓子の文化を知り京都の生活文化を理解する一助とする。京菓みに影響を与えた事柄(歴史・由来・銘・意匠・色)や人物(千利休居士・尾形光琳)を知ることにより、単なる食べ物としてではなく総合文化の京菓子の面白さ、楽しさを知ってもらおう。また、京菓子が文化の産物であるという観点から京菓子の成り立ち、その周辺での出来事までを取り上げて検証していく。</p>	
	グローバル・ボランティア論	<p>ボランティアのなかで生じる課題とその解決策について、様々な事例紹介や実践者の話題提供をもとに考察する力を養う。受講者は、多様なボランティアの事例紹介や、ボランティア実践者による話題提供を受け、ローカルな実践のなかで生じる課題について、何が問題であり、どのような社会的要因が解決を阻止しているのか、どうすればよりよい解決が可能なのかを、グローバル化の影響やICTの可能性を視野に入れつつ考察し、それを文章で表現できることを目指す。</p>	
	国際関係論 1・2	<p>国際関係に関する基本的な知識と考え方を身につけるため、現代の国際政治を考える上での基本的視座・視点、および基礎的な概念を解説する。国際関係論1では、国際関係の歴史的展開を紹介したうえで、いくつかの具体的なテーマをとりあげて、現在の国際政治のあり方と課題について講義する。国際関係論2では、国際関係の基本的な理論を紹介したうえで、いくつかの具体的なテーマをとりあげて、現在の国際政治のあり方と課題について理論的に考察する。本授業を通して、国際社会の動きを観察し、分析するために必要な知識や視点を身につけることを目指す。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
講義	キリスト教学 1	本講義は、キリスト教とはいかなる宗教であるのかという問いに対して、現代宗教学の立場から客観的に論じようとするものである。宗教現象としてのキリスト教の基本構造を現代宗教学の諸方法（宗教現象学、宗教社会学など）によって解明し、宗教心理学から現代聖書学へと考察を進める。これによって、現代宗教学の全体像が明らかにされる。本講義の受講を通じて、多岐にわたる現代宗教学の全体像とその特徴についての的確に指摘できるようになり、日常生活において出会う諸事象を宗教学的に考える力がつくことを目指す。	
	キリスト教学 2	現代世界における宗教を論じる場合、グローバル化と多元化という二つの動向は決定的な意義を持っている。この講義では、キリスト教思想の新しい動向（宗教と科学との関係論）を、現代世界が直面する多様な諸問題との関わりで学ぶことを目標とする。そのために、キリスト教の思想的源泉である聖書とキリスト教史（科学思想の関係性の歴史＝「宗教と科学」関係性に留意する）とを参照しつつ、問題の核心に迫りたい。本講義の受講を通じて、聖書からはじまるキリスト教思想の歴史的展開に即して、またキリスト教と社会との多層的な関わりに応じて、キリスト教思想を論じることができるようになること、キリスト教思想の現代的意義を具体的に問題に即して考える力がつくこと、現代を生きるキリスト教の動向を「宗教と科学」関係論の観点から分析できるようになることを目指す。	
学科専門科目 実践研究	A 英語基礎演習	この授業では、「書く」技能に焦点をあてる時間を持ちながら、英語4技能を総合的に活用した取り組みを通して、初級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1レベル）の英語力を習得することを目指す。英語の文章の構成など、小論文を書くために必要とされる基本的なスキルを学び、様々なトピックを設定してペアやグループで英語によるコミュニケーションをとり、英語で自分を表現する力を身につけていく。	
	実践文化演習 a (フィールドラナーニング)	フィールドワーク（聞き取り・観察など）の技法と倫理の基礎を学び、小グループ単位で調査計画を立てて実践することを通じて、グローバル化する社会の現実を捉え、それに対処する力を養う。受講者は小グループ単位で調査テーマを決め、仮説を立てて、それを検証するための調査計画を完成させる。調査計画案の発表と質疑応答や検討などを経て、実際に現場へ出て調査を実施し、その成果を発表する。必要に応じて、授業時間外での相談や活動、学外への移動を伴うこともある。	
	実践文化演習 b (語学集中 ドイツ語)	この授業では実践的なコミュニケーションに必要なドイツ語を集中的に学ぶことで、初級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1-A2レベル）のドイツ語を使いこなし、簡単な日常会話や意見の交換ができるようになることをめざす。そのため、コミュニケーションに特化した教材を使用し、学生の演習が授業の中心となる。受講生は、授業で身につけた知識を、この授業に後続して実施されるドイツ人留学生との交流会で実際に使用することで、自身の習熟度を知ることができる。	
	実践文化演習 c (語学集中 フランス語)	この授業では実践的なコミュニケーションに必要なフランス語を集中的に学ぶことで、初級レベル（ヨーロッパ共通基準（CEFR）でいうところのA1-A2レベル）のフランス語を使いこなし、簡単な日常会話や意見の交換ができるようになることをめざす。そのため、コミュニケーションに特化した教材を使用し、学生の演習が授業の中心となる。受講生は、授業で身につけた知識を、この授業に後続して実施されるフランス語話者との交流会で実際に使用することで、自身の習熟度を知ることができる。	
	実践文化演習 d (語学集中 中国語)	この授業では実践的なコミュニケーションに必要な中国語の会話表現を集中的に学ぶことで、初級レベルの中国語を使いこなし、自己紹介や簡単な日常会話、意見の交換などができるようになることをめざす。そのため、コミュニケーションに特化した教材を使用し、学生の演習が授業の中心となる。受講生は、授業で身につけた知識を、この授業に後続して実施される中国語話者との交流会で実際に使用することで、自身の習熟度を知ることができる。	
実践文化演習 e (語学集中 韓国・朝鮮語)	この授業では実践的なコミュニケーションに必要な韓国・朝鮮語の語彙や表現を集中的に学ぶことで、初級レベルの韓国・朝鮮語を使いこなし、自己紹介や簡単な日常会話、意見の交換などができるようになることをめざす。そのため、コミュニケーションに特化した教材を使用し、学生の演習が授業の中心となる。受講生は、授業で身につけた知識を、この授業に後続して実施される韓国・朝鮮語話者との交流会で実際に使用することで、自身の習熟度を知ることができる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目  実 践 研 究  B	実践文化演習 f (カナダ語学研修)	カナダのトンプソン・リヴァーズ大学での英語研修及び現地の小学校訪問やボランティア活動などを通して、カナダの人たちと交流することにより、生きた英語の運用能力を高めるとともに、視野を広げ、国際感覚を養う。事前授業においてはカナダの地理・歴史や英語の基本的な表現を学んだり、カナダの子供たちに英語で日本文化を紹介するための準備を行う。現地の3週間の語学研修では、午前中は現地の教員による英語の授業、午後は小学校訪問、現地の学生たちとの交流に加え、スポーツその他の行事なども行う。	
	実践文化演習 g (中国語学研修1)	本授業は台湾への中国語語学研修の事前講義である。中国語会話を実践的に使用しながら、華人社会の文化諸相を学ぶ。事前講義にて必要な知識を学び、現地研修(台湾・淡江大学)にて中国語をレベルアップするとともに、華人社会に対する見聞を拓げ、華人文化を体験する。本事前講義を通じて、右記の目標を目指す。1. 事前講義で台湾や華人社会に関する基礎知識を修得し、現地研修では当地のルールに則って自律的に生活できるようになる。2. 台湾の人々および諸外国からの留学生たちとコミュニケーションをはかり、中国語会話を実践的に運用することができる。3. 華人社会や中国語・華流など生の中華文化に触れ、華人社会への総合的知識を獲得する。	
	実践文化演習 h (中国語学研修2)	本授業是北京への中国語語学研修の事前講義である。中国語会話を実践的に使用しながら、中国社会の文化諸相を学ぶ。事前講義にて必要な知識を学び、現地研修(中国・首都師範大学)にて中国語をレベルアップするとともに、中国社会に対する見聞を拓げ、中国文化を体験する。本事前講義を通じて、右記の目標を目指す。1. 事前講義で中国や北京社会に関する基礎知識を修得し、現地研修では当地のルールに則って自律的に生活できるようになる。2. 北京の人々および諸外国からの留学生たちとコミュニケーションをはかり、中国語会話を実践的に運用することができる。3. 中国人社会や中国語・週末旅行に向かう世界遺産に関する情報を収集し、それらの総合的知識を身につける。	
	実践文化演習 i (韓国語学研修)	この授業は韓国・朝鮮の言語文化を現地で実際に学ぶものであり、学内での事前講義と現地での研修からなる。事前授業では、韓国での生活の心構え、韓国の文化や歴史について学び、生活するうえで必要な会話なども身につける。現地研修は、長期休暇の時期に、韓国の大学の語学堂で約3週間の研修を受ける。語学堂での講習は、会話、聴解、読解を中心に授業が構成されており、別途、文化講義や遠足などにも参加する。そうした学びの過程を通じて、韓国・朝鮮語の力を伸ばすことと、韓国・朝鮮文化への理解を深めることを目指す。	
	実践文化演習 j (ヨーロッパ文化研修)	この授業はドイツやフランスの文化を現地で実際に学ぶものであり、学内での事前学習と現地での研修からなる。国内での事前学習では、受講生が書籍やインターネットを使用して、研修地の情報を収集し、パワーポイントを使用してそれについてプレゼンテーションをおこなう。現地研修では、事前学習で得た知識を現地で検証する。そうした取り組みをとおして、われわれが持つイメージや得られる情報が現実とどこまで対応し、あるいは乖離しているかを知ることが目的である。	
	実践文化演習 k (インド文化研修)	この授業はインドの宗教と文化を現地で実際に学ぶものであり、学内での事前講義と現地での研修からなる。国内での事前講義においては、宗教(特に仏教)を中心としたインドの歴史や文化について理解する。現地研修においては、実際に仏跡を訪れ、インドの文化に肌で触れることにより、事前学習で得た知識を現地で検証する。そうした学びの過程を通じて、仏教を中心としたインドの宗教や文化について、現地での体験や発見を踏まえて自分の言葉で説明できることを目指す。	
	実践文化演習 l (中国文化研修)	この授業は中国の宗教と文化を現地で実際に学ぶものであり、学内での事前講義と現地での研修からなる。国内での事前講義においては、仏教を中心とした中国の歴史や文化について理解する。現地研修においては、実際に仏跡を訪れ、中国の歴史と文化に触れることにより、事前学習で得た知識を現地で検証する。そうした学びの過程を通じて、仏教を中心とした中国の宗教や文化について、現地での体験や発見を踏まえて自分の言葉で説明できることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学科専門科目 実践研究	B	English Workshop & Camp	国際都市京都をフィールドとして、実践的に英語を学ぶ授業である。授業の前半は、日本の茶道、華道、歌舞伎や能についての英文を読んだり、英語の動画を観たりして日本の伝統文化についての理解を深めたのちに、英語で書いたり話したりして日本の伝統文化について紹介してもらう。授業の後半は日本と海外の現代文化や社会をテーマに、これについての英文を読んだり動画を観て理解を深め、海外の観光客にインタビューをしたり、留学生と英語でディスカッションすることで、それぞれの文化や社会を比較考察する。こうした演習を通して英語4技能の向上を目指す。	
		English Workshop 2	国際都市京都をフィールドとして、実践的に英語を学ぶ授業である。京都の神社仏閣や日本文化を紹介する英語の資料を読んだり、通訳ガイドと観光客の英会話を聞いたりして、京都を紹介する基本的な英語表現を学ぶ。グループによる日本文化や京都の観光名所に関する英語ディスカッションや、観光名所案内の原稿作成とグループプレゼンテーションを通じて、話す力や書く力を伸ばす。英語で京都案内する学外実習を通して、外国語運用能力を伸ばすとともに、異文化理解を深め、日本の文化を問い直す。	
		English Workshop 3	この授業では、英語を用いて「働く」ことをテーマに、訪日外国人への対応において重要な、自国文化と異文化を尊重する姿勢を身に着けるとともに、将来の仕事に対するヴィジョンを明確にし、英語運用能力を高めていく。そのために観光業、運輸業、商社など、様々な職場で用いられる英語の文書に触れたり、様々な職業に従事する人々を取り上げた英文を読んだり映像を観た上で、グループでのディスカッションやプレゼンテーション、レポート作成を行う。	
		English Workshop 4	国際都市京都をフィールドとして、実践的に英語を学ぶ授業である。飲食店や土産物店などで接客する際に用いる英語を学び、外国人観光客に対応する学外実習を通して、外国語運用能力を伸ばすことを目的とする。英語力を身につけ、自国の文化と京都の伝統的な文化について理解を深めることで、国際人として成長してもらうことを目標とし、他の国際人たちと内容のある対話ができるように成長してほしい。	
	C	Pop Culture in English 1	Michael Jackson, The Beatles, Madonnaといった英米のポップ・スターをとりあげながら、語彙の増強と文法の強化をはかる。ポップ・スターにまつわる内容であるが、教科書の問題に取り組むことで、TOEIC対策も兼ねる。ポップ・スターたちに関する自伝的な事実、時代や地域の背景に注意を払いつつ、音楽を聴き、歌詞を読んで、ポップミュージックの世界への導入とし、さらに英語を勉強する動機づけとする。	
		Pop Culture in English 2	Adele, Susan Boyle, Aerosmithといった英米のポップ・スターをとりあげながら、語彙の増強と文法の強化をはかる。ポップ・スターにまつわる内容であるが、教科書の問題に取り組むことで、TOEIC対策も兼ねる。ポップ・スターたちに関する自伝的な事実、時代や地域の背景に注意を払いつつ、音楽を聴き、歌詞を読んで、ポップミュージックの世界への導入とし、さらに英語を勉強する動機づけとする。	
		World News	この授業では、新聞やインターネット記事、映像や写真報道にいたるまで、様々なジャンルのニュースを題材とする。報道対象となる様々な分野でよく用いられる語彙・文法・文章構造などを学習し、ニュースを読んだり聴いたりするために必要なスキル（要点をつかむスキミングやリスニングなど）を伸ばす。授業ではまた、様々なタスクやロールプレイを通して、自分でニュースを創作し、それを書いたり話したりする。最新のニュースについてディスカッションを行う機会も設けていく。	
		Global Communication	この授業は、実践的なビジネス英語を学ぶことを目的とする。アポイントを取ったり、手配をしたり、プランや意見を示したり、訪問者をもてなしたり、電話をしたりEメールを送ったりといった、ビジネスでよく遭遇する場面に必要な英語力を身につけていく。それぞれの仕事をこなすために必要な語彙や構文を学習し、様々な場面を設定したタスクやロールプレイで実際に繰り返し使ってみる。	
Teaching English to Children 1	子どもへの英語の教え方を学び、実践する授業である。基本的な言語習得のプロセスを学びつつ、英語の歌、チャンツ、ゲームなどを通して子どもたちが英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、英語によるコミュニケーションを体験する中で、英語圏の生活や文化への理解を深めることができる英語の指導法を学ぶ。受講生は、授業計画を立て、教室運営に必要な表現を使用して英語で短い授業ができるようになることを目指す。			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 専 門 科 目  実 践 研 究  C	Teaching English to Children 2	子どもへの英語の教え方を学び、実践する授業である。英語の音声や基本的な表現に触れてきた子どもたちが、英語を「聞く」「話す」ことに加え、絵本等を通じて「読む」「書く」ことに慣れ親しみ、英語圏の生活や文化への理解を深めることができる英語の指導法を学んでいく。受講生は、英語で「読む」「書く」活動を取り入れる際の留意点を学んだ上で、教室運営に必要な英語表現を使用して短い授業ができるようになることを目指す。	
	言語文化演習（英語） 1	本授業で受講生は、現代文化にまつわる話題についての文章を英語で読み、大意をつかんでそれぞれの文化に対する理解を深め、考察していく。読んだトピックに関して英語でミニエッセイを書いたり話したりする時間を設け、この演習の中で、主題を持ち、基本的なエッセイの構成を押さえた論理的な英語の文章を書いたり話したりする力を身につける。英語4技能のなかでも特に「読む」「書く」力を伸ばすことを目指していく。	
	言語文化演習（英語） 2	本授業で受講生は、現代文化にまつわる話題についての文章を英語で読み、大意をつかんでそれぞれの文化に対する理解を深め、考察していく。読んだトピックに関して英語でミニエッセイを書いたり話したりする時間を設け、比較対照といった手法を学んだり、説明文や物語文など様々な種類の文章を書いたり話したりする力を身につける。英語4技能のなかでも特に「読む」「書く」力を伸ばすことを目指していく。	
	言語文化演習（ドイツ語） 1・2	この授業では、ヨーロッパ共通基準（CEFR）A1.1レベルのドイツ語コミュニケーションおよび読解をおこなうために必要な文法・会話力を身につけるのが目標である。ペアワークによる対話をくり返して必要な表現を覚え、基本的な文法規則を応用できるようになる。ゲームやクイズを通して語彙を増やし、楽しく簡単なドイツ語会話を学ぶ。また言語だけではなく、ドイツの生活や文化についてビデオ等を使って紹介し、それについてディスカッションをおこなう。	
	言語文化演習（フランス語） 1・2	この授業では、ヨーロッパ共通基準（CEFR）A2レベルのフランス語読解力を身につけ、フランス語の文章読解を通じて異文化理解力を高めることが目標である。フランス語中級程度の（初級文法を終えた）学習者を対象に、まとまった長さのテキストを読み、語彙（語の意味や発音）や文法を確認するとともに、テキストに関連する映像資料やインターネット記事などを適宜用いてフランス文化についての知識を深め、学習者自身がフランス語で情報を探す練習もおこなう。	
	言語文化演習（中国語） 1・2	この授業では、中国語の発音の基礎（ピンインを含む）と基本的な文法・語句を習得している受講生を対象に、テキストの内容を通覧し、各課の本文を繰り返し音読する等の作業を通じて、中級レベルの中国語へと橋渡しすることを目指す。具体的には、発音や文法事項を復習しながら、テキスト各課の単語や文法を学び、本文中の表現を使いこなせるように繰り返し練習することで、単語や文法の力を伸ばし、聞き取りや会話も含めた総合的な力を身につける。	
	言語文化演習（韓国・朝鮮語） 1	事例研究を通し、現代の韓国と北朝鮮の政治文化の基礎的理解を深めることを主な目的とするが、同時に授業を通し、日本の隣国である韓国と北朝鮮という国に慣れ親しむことも重要な目的の一つである。担当者による一方的な講義は避け、毎回、受講生のグループによる30分程度の事例研究の課題発表を基に担当者の説明と解説を伴いながら、受講生同士による質疑応答と討論などを含めた受講生参加型の授業を行う。受講生には、2回の課題発表を課す。	
	言語文化演習（韓国・朝鮮語） 2	この授業は、言語文化演習1の応用編にあたる。事例研究と教材のクリティカル・リーディングを通し、現在の日韓関係と日朝関係の応用的理解を深めることを主な目的とするが、同時に授業を通し、日本の隣国である韓国と北朝鮮という国を理解することも重要な目的の一つである。担当者による一方的な講義は避け、受講生のグループによる事例研究の課題発表を基に担当者の説明と解説を伴いながら、受講生同士による質疑応答と討論などを含めた受講生参加型の授業を行う。受講生は、各自の事例研究のテーマに対し、第1週目は課題発表を行い、第2週目はその解決策の模索について発表する。	



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科専門科目	実践研究 C	表現文化演習 1	インドにおいて二千年も前に書かれた『ナーティヤシャーストラ』(Nāṭyaśāstra)という演劇論がある。本授業では、それに基づき伝えられてきた表現技法を身に付ける。インドに伝わる表現技法とりわけ古典舞踊の様々な技法、とりわけムドラー(mudra印相)を学習し、その背景にある文化的な要素も理解していく。そして、最終的にそれらの技法を用い、物語を創作し、実演発表を行う。学習到達目標は(1)インドの古典演劇論の技法を身に付けること、(2)芸術表現を通して異文化理解を深めることである。	
		表現文化演習 2	身体表現を通じた欧米文化と日本文化の理解を目的に、舞台表現(身体表現・ダンス)について、欧米のリズムの影響を受けたダンスとして基礎的なリズムダンスからミュージカル等でのダンスを、また、日本の伝統的なリズムを受け継ぐダンスとしてよさこいソーラン等をそれぞれ体験し、さらにグループで独自のダンスを創作・発表する。身体表現を意識的に行うことを通じ、文化表現としての身体の動きのあり方を理解し、身体を用いた自己表現とコミュニケーションの楽しさと重要性を知る。	
		西洋史文献を読む 1・2	西洋あるいは欧米の歴史的に重要な文献・史料を読む。英語の史料が主となるが、日本語の史料なども取り上げる。とりわけ、アメリカ史や日米関係史に関わる、アメリカ独立宣言、アメリカ合衆国憲法(一部)、日米和親条約、日米安全保障条約などを世界史的背景とともに学ぶ。それぞれの史料の成立過程や歴史的意義を学ぶとともに、現代的意義や影響についても考える。条約などに見られる英語と日本語の相違点にも注意を払いながら理解を深める。また、国際連盟、国際連合(世界人権宣言など)等の国際機関に関わる重要な史料も取り上げる。	
	卒業研究	学士課程の学修の集大成として、4年間の主体的学びと研究の成果を、教員の指導のもと卒業論文、または卒業研究にまとめる。主体的研究とは、自ら設定した問題を探究する営みであるが、その際の問題設定や探究方法は、人文諸科学の視点と方法を応用したものであることが望まれる。探究方法や表現形式は研究倫理を踏まえたものでなければならない。学生は卒業論文の執筆あるいは卒業研究作成を通じて、人文科学の学問的視点・手法を体得するが、加えて問題設定・情報収集・分析考察・説得表現などの諸能力を総合的に身につける。		
現代総合科目	キャリア形成系科目	キャリアデザイン概論 1	大学での学びや職業社会を取り巻く情勢に触れることにより、自らのキャリア形成における課題を明らかにすることを目的としている。具体的には、大学生活を主体的に有意義に過ごすために必要な知識・態度などを身に付け、目標を持って大学生活をデザインし過ごすことができるようになることを目指す。大学という場は「卒業後、どのような人生を送るのか」を考える上でとても大事な場であり、時間である。座学だけでなく、毎回、エクササイズやグループワークを取り入れることにより、社会へ出る上で必要なコミュニケーション力の育成も学ぶ。	
		キャリアデザイン概論 2	「キャリアデザイン概論1」での学びを踏まえ、働くうえで必要とされる能力や社会現実についての理解、働くことと密接に関係している法・制度・システムに関する知識など、大学在学中から身に付けておくことが望ましい基礎的な知識や能力の定着を目指す。講義形式で知識や情報を提供するほか、個人ワークやグループワークなどを取り入れながら進める。そして、大学生活を主体的に目標を持って過ごすことができるよう、自分自身の人生、大学生活の送り方について考える機会を提供する。	
		キャリアデザイン実践 1	キャリアデザインとは、社会の中でどのように働き、どのように生きていくかを自分自身で考え、明確にすることである。一人ひとりが社会の中で自立して生きていくために必要とされる「社会人基礎力」について、グループワークを中心とした体験学習の中で、外部講師とともに考え、将来につながる学生時代の目標を立案するとともに、自分のことを他人にも分かりやすく発信できる能力を身に付け、自己肯定感を向上させることを目指す。この授業は主に第2学年を対象とする。	
		キャリアデザイン実践 2	キャリアデザインとは、社会の中でどのように働き、どのように生きていくかを自分自身で考え、明確にすることである。一人ひとりが社会の中で自立して生きていくために何が必要なのか、自らの進路や将来について、グループワークを中心とした体験学習の中で、外部講師とともに考え、自分の強みと特性を明確に理解した上でキャリアビジョンの計画を立て、進路とのミスマッチを減らすことを目指す。この授業は主に第3学年を対象とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	インターンシップ1 大学コンソ京都	本授業は、大学コンソーシアム京都による単位互換包括協定に基づく共同開講プログラムとして実施される。在学中に自らの専門分野や将来のキャリアに関連した就業体験をおこない、各自の研究活動やキャリアプランニングに役立てるとともに、企業や非営利組織において就業体験をすることにより、高い職業意識を育成する。実社会での体験を現在の研究活動へ応用するとともに、自らのキャリアプランニングを明確にしていく。	
	インターンシップ2 大谷大学	本授業は、就業体験を通じた将来像の明確化とコミュニケーション能力の涵養を目的とする。特に在学中に就業体験をおこなうことで、自分の将来像を明確にすることができるようになること、グループによる討論ならびに就業先での実務を通して、自身の意見を他者に伝え、また他者の意見を自身に取り入れ、コミュニケーション能力を高められるようになることが求められる。各自の将来像を明確にすべく、「働くこと」をテーマにして事前学習をおこない、その成果をふまえて、企業や非営利組織で就業体験をする。そして最後に、インターンシップを通して学んだことを、ディスカッション形式で議論する。	
	フィールドワーク特殊演習 (PBL)	京都市美術館は2020年3月21日に京都市京セラ美術館として、新たに生まれ変わる。本授業では、京都市京セラ美術館をフィールドとして、①美術館の基本的な運営方法を理解する②美術館の実際の運営を通して課題発見力、問題解決力、実行力を向上させる③グループワークや学芸員とのやりとりを通してコミュニケーション能力を向上させる、④京都市京セラ美術館の魅力・価値を高める企画立案・提案を行うことを目標とする。そのため、グループワークを基本としたPBL型のアクティブ・ラーニングによる授業を行う。授業で、まずミュージアムの基礎的な知識を学び、現状の課題を把握することで、グループワークを通して、新たな層の集客や社会貢献の視点から、問題解決にあたって「地域×美術館」、「教育×美術館」、「国際×美術館」といった観点で企画立案・提案までを目指す。	
	思考法入門	近年、ある意見や議論に対して「賛成・反対」、「善い・悪い」という二元論で結論を導く風潮が強まっているが、それはともすれば思考停止を引き起こしかねない。そこで、思考停止に陥ったり、詭弁（虚偽の論法、おかしい論理）に惑わされないためのスキル、現代社会が抱える様々な課題に対して自らの意見を持ち、判断することができるスキルの涵養を最終的な到達目標として授業を進めていく。	
	日本国憲法1・2・3	日本国憲法が私たちの生活と密接に関わっていることを、特に人権の問題を通じて考える。立憲主義の意味、日本の近代化と明治憲法、日本国憲法制定の歴史、日本国憲法が保障するさまざまな基本的人権、統治機構の原則などを勉強する。最初に法の世界の特徴を理解し、近代国家が憲法を持つこと（立憲主義）の意味を考え、それを踏まえて、日本国憲法誕生の意義、そこに盛り込まれている人権の歴史、さらに具体的事例を念頭に置きながら人権の各論を理解する。また憲法の統治機構原則についても基本的な問題点が理解できるようする。	
	青年と社会教育	社会教育・生涯学習、個人の趣味・教養・資格ばかりでなく、現代社会の暮らしに関係するさまざまなテーマに取り組んでいる。本講義で、特に青年期の人々が抱える様々な課題に焦点を当て、それらの課題と向き合っている教育/学習実践について学ぶとともに、青年たちがより良い生涯を展望するために、どのような学びをデザインして言うことができるのかを考える。 青年の学びをテーマとした具体的な社会教育・生涯学習の学習活動について、基礎的な知識を踏まえたうえで、簡単な調査・分析・企画・運営を行うための実践的なスキルを身に着ける。	
	社会福祉と社会教育	社会教育・生涯学習、個人の趣味・教養・資格ばかりでなく、現代社会の暮らしに関係するさまざまなテーマに取り組んでいる。本講義で、特に障害者・高齢者・子どもが抱える様々な課題に焦点を当て、それらの課題と向き合っている教育/学習実践について学ぶとともに、障害者・高齢者・子どもより良い生涯を展望するために、どのような学びをデザインして言うことができるのかを考える。 障害者や高齢者、子どもをテーマとした具体的な社会教育・生涯学習の学習活動について、基礎的な知識を踏まえたうえで、簡単な調査・分析・企画・運営を行うための実践的なスキルを身に着ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	ポルトガル語圏の暮らしと言葉 1	ポルトガルの歴史や文化、また日本やマカオなどとの関係を学ぶと同時に、初歩的な文法の学修を通して日常会話で使える実践的なポルトガル語の修得を目指す。その上で、今日、世界で約2億5千万人を数えるポルトガル語圏諸国の人口のうち、その約80%（2億人）を抱えるブラジルがポルトガル語を公用語とするに至った歴史的な経緯について概観するとともに民族形成の背景となった宗教（キリスト教、カントンブレ、他）や神話、文学（寓話、民話）にも注目し、考察をおこなうことでブラジルの大衆文化についての理解も深める。	
	ポルトガル語圏の暮らしと言葉 2	1990年に入管法が改正されたことで急増した在日ブラジル人の集住地域では、教育現場における子どもたちとの円滑なコミュニケーションが喫緊の課題として求められている。その際、単に語学としてブラジル・ポルトガル語を学ぶだけでなく、彼らの生活文化や習慣といった「暮らし」を理解することが不可欠となる。そこで、この授業では「ブラジリダーデ」と呼ばれる喜怒哀楽をはじめ、ブラジル文化の風土的特性や価値観を学修するとともに、基礎的な文法知識を踏まえた日常会話能力の向上を目指す。	
	情報メディアと社会	情報化社会において、「情報」と「メディア」は重要なキーワードである。そこで、『情報社会における「情報」と「メディア」の理解を』をテーマとして、「情報」と「メディア」とは何かを考える。具体的には、「情報メディアと社会」というテーマをメディア情報学の視点で概観したうえで、様々なキーワード（「データと情報」、「アナログとデジタル」、「リアルとバーチャル」、「メディア」など）を観点として、多様な視点から本授業のテーマに迫る。さらに、コンピュータの発達とネットワーク化から生じた影響をいくつかのキーワード（問題解決の科学、メディア論、デジタル環境論等）から考察する。	
	ワード・プロセッシング入門	文章作成は現代社会人にとって必須のスキルである。そこで、文章作成のための技術や考え方をワープロソフトを利用しながら獲得する。そこで、PCによる文字の入力方法（IME等）を身につけ、Microsoft Wordの基本操作及び書式・レイアウト（文字・段落・表の作成などの装飾）、オブジェクト編集（罫線・図形・スマートアート、グラフ作成）、長文編集（ルビ・割注・脚注・セクションとヘッダー・フッター）、様々な印刷・出力などの諸機能について段階的に学ぶ。これらを通じて、各種文書の基礎的な作成やデザインの方法を習得する。	
	ワード・プロセッシング応用	論理的な文章を作成するには、文章のアウトラインを作成しながら、思考を整理しなければならない。そのためのツールとしてワープロソフトが活用できる。そこで、日本語入力やMicrosoft Wordの基礎を習得している学生を対象に、段階に分けてより高度なWordの機能を用いた論文・レポートなどの作成技術（スタイル・インデント・タブ・オブジェクト・図表番号・脚注・目次）と思考方法の習得をめざす。また、総合的なWord文書の作成演習を実施することで、様々な文書を作成する力を養う。	
	PC利用による表計算入門	数理解析の専門分野だけでなく、データベースの処理や文献の管理、予定の管理など、日常的の様々な場面で表計算ソフトを利用する必要がある。したがって、現代社会においてこの技能は必須のものである。この技術を獲得するためには、基本的なソフトの理解をしながら、その考え方を獲得していくことが効率的である。そこで、本授業では、Excel を利用した表計算についての基礎的な事項を学習する。具体的には、表計算ソフトMicrosoft Excel の基礎的な利用法（Excelの基礎知識の習得・データ入力・表の作成の基礎と発展・検索・置換・印刷・関数（基礎、条件式、セルの参照）・複数シート操作、複数シート間の集計・グラフ作成の基礎と応用・データベース機能の基礎と応用など）についての演習を行う。	
	PC利用による表計算応用	表計算を活用することで、様々なICTへの応用が可能となる。そのため基本事項は表計算ソフトを深く理解する必要がある。そこで、基礎的なExcelの活用を理解した学生（「PC利用による表計算入門」の内容相当のことを理解している）を対象として、Excel を利用した表計算について応用的な事項を学習する。具体的には、表計算ソフトMicrosoft Excel を用いて効率的にデータを加工・生成するための基礎（応用的な関数やVBAなど）を学ぶ。これにより、大規模なデータや大量のファイルに対する規則的な読み取り・加工・生成処理を効率的に行うことだけでなく、そうした処理に関わる危険性・限界を的確に把握し、安全で妥当な使用法を認識できるようになることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	PC利用によるプレゼンテーション	社会人においてプレゼンテーションは必須の技術である。コンピュータを用いたプレゼンテーションの手法の基礎について学ぶことで、適切に情報を伝える技術の習得を目指す。具体的には、図像の効果的な利用方法などを、Microsoft社製Powerpointを用いて練習する。次に、技術だけではなく、自分の考えをいかに相手に効果的に伝えるか、学会発表などでよく見られる発表形式を模擬することにより学習し、人前で発表出来るスキルを身につける。この授業を通して、大学における研究成果の報告を効果的にできることを目指すとともに、社会人として必要な技術を養成する。	
	PC利用によるレポート・論文技法	学術的な目的だけではなく、多様な目的でレポートや論文の作成技術は必要であり、現代社会では必須の力であるといえよう。論文やレポートの作成においては、PCを活用することでその効率は飛躍的に向上する。そこで、パソコン・ソフトを用いて、形が整ったレポート・論文を作成する。具体的には、Microsoft Wordを利用して、レポート・論文作成のための事前準備（参考文献の収集やリストの作成、研究ノートの作成、レジュメの作成）、レポート・論文を作成するためのアウトラインの作成、レポート・論文に適した形式（文章表現・引用の方法、脚注、図表の活用、参考文献一覧）、作成後の確認方法（プリントアウトと校正）について学ぶ。最終的には、書式が整ったレポート・論文を作成することを目指す。これにより、単にソフトの使い方に習熟するのではなく、他者に対して理解しやすい文章を作成する力を養成する。	
	画像処理入門	デジタル技術の発展により画像を使い、多様な表現が可能になった。多様な表現を実現するためには、単に画像を使うだけでなく、デジタル画像とは何かということを理解した上で、適切な処理を行う必要がある。そこで、簡単な画像を作成し、画像を加工・編集しながら、コンピュータで画像ファイルを扱う基礎を学ぶ。これにより表現するとは何かということについて考える力を養成する。具体的には、画像処理ソフトを用いて、デジタル画像の基本的なしくみ（画像のサイズと印刷解像度、縦横比、トリミング、レイヤー、ラスタとベクタの違いの理解など）を学び、その扱い方を身につける。実際に、写真画像の編集・加工、イラストやweb素材などの画像作成を行った上で、画像をweb上で公開し、作品の自己評価を行う。	
	画像処理応用	画像のデジタル化により画像処理が容易になったが、基礎理解ができていないがために不適切な表現を示す可能性も増加した。この問題を解消するためには、本来の画像（アナログ画像）とデジタル画像の基礎知識や違いを理解した上で、デジタル画像を処理していく必要がある。そこで、デジタル画像以前の写真とデジタル画像の違いを実際に比較しながら、画像処理のノウハウを学ぶ。具体的には、デジタル画像について（デジタル画像の仕組み、ファイル形式の特徴、画像の品質）検討する。また、写真に関わる基礎知識（三次元の世界を二次元画像に定着させる際に基礎となる概念、レンズの特徴、シャッターやファインダー形式）、より効果的な表現に関わる知識（色彩を忠実にまた鮮やかに記録・再現するために必要な知識）を学んでいく。これにより、画像処理の基礎を確立し、デジタル時代にふさわしい画像制作をする力を養成する。	
	PCミュージック入門	音楽は人間にとって必要な娯楽である。かつては特殊技術であった音楽の作成がPCの出現により、専門家でなくとも可能になった。しかし、作成技術と適切な音楽とは必ずしも対応するものではない。適切な音楽を作成するには、デジタルデータとは何かといった基礎知識からその適性までを理解する必要がある。そこで、PCで音楽データを作る手法、MIDIデータや音源ファイルの概要および音楽の基礎を学ぶ。これにより音楽作成を楽しむとともに音楽とは何かということを考えるきっかけとする。具体的には、デスクトップミュージック（DTM）の基礎知識、音声合成ソフトやMIDIシーケンサなどのソフトウェアの基礎（音楽データの入力、パラメータ変更など）、基本的な音楽編集について学ぶ。	
	PCミュージック応用	デジタル技術の発展により多様な音楽的表現が可能になった。ただし、その実現のためにはソフトの理解ではなく、適切な知識をもとにその可能性を探ることが必要である。音楽的な知識の理解のためには、実際に音を作りながら考えるのが最も効率的である。そこで、PCによる音楽データの作成を通じて音楽に関するさまざまな知識を学ぶ。具体的には、基礎的なDTMの知識と技能（「PCミュージック入門」の内容相当の技能と理解）を持つ学生を対象に、音楽理論に対応した作曲経験を実際に作成し、最終的には各個人での作曲を体験する。これによりデジタル技術を使った高度な音楽表現技術を養成するとともに、多様な表現技術やそのための思考力を身につけることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 キャリア形成系科目	Webサイト構築入門	情報発信ツールとしてWebの力は大きい。Webページのコンテンツ自体はツールを利用して作成できるが、より高度なデザインやWebページとは何かを理解するには、その基本原理であるHTML・CSSを理解する必要がある。また基礎を理解することで、情報発信のツールとしての特性も理解することができる。そこで、HTMLおよびCSSを利用し、Webサイト構築に必要な基礎知識・技術を学ぶ。具体的には、HTMLの基本的な文法（基本構造・ハイパーリンクに関わる要素・テーブル要素・CSSの基礎）を解説するとともに、HTMLファイルを作成して、実際にWebサイトを構築していく。これにより、情報社会の情報発信の意義を理解する。	
	Webサイト構築応用	Webの情報発信力の要因の一つは、インタラクティブな表現ができることにある。この表現にはJavascriptのようなプログラミングの理解が必要となる。そこで、Webの基礎であるHTML・CSS（Webサイト構築入門）の理解を発展した上で、Webサイト上でインタラクティブな表現を構築する手法（Javascriptの利用など）を学ぶ。具体的には、CSSを用いてページのレイアウトを作成する。その上で、プログラミングの基本（変数・条件分岐・繰り返し処理）や応用的な処理（乱数・キー入力・タイマー処理など）を含んだページを作成していく。これにより高度な情報発信力を養成する。	
	日本語表現（入門） 1・2	大学での授業内課題やレポートの作成に必要な日本語表現能力を身に付けることを目的とする。本授業では、第1週に「新しい作文・小論文の作成」、第2週に「作文・小論文の講評の後、書き直し」を行い、基本的に2週間を1セットのユニットとして進めていく。またそれらの前に講義と演習の時間を設ける。この授業で扱う作文の基本作法は大きく分けて三つあり、(1) 原稿用紙の使い方、(2) 自分と他者の意見の区別、(3) 3部構成による小論文の書き方である。これらの習得を通じて、最終的には自分の主張を根拠立てて述べ、主張への批判に反論できる論理的思考・表現に到達することを目標とする。	
	日本語表現（実践）	基本的な文章構成や根拠のあげ方を学び、自分の「経験」や「思考」を人に分かりやすく伝える力を身につけ、レポート作成などの様々な場面で必要となる文章を書く力を身につける。具体的には、おおよそ4~5週間に1課題のペースで3つの文章を作成する。(1) 自らの経験という身近な話題を取り上げ、ていねいに書く。(2) 普段は見えにくい自らの価値観や世間一般の意識を取り上げ、根拠をあげながら論述する。(3) 上記2つの手法を使いながら、短めの「書評」を完成させる。	
	発想から表現へ	パソコンスキルの上達だけでなく、総合的な表現力の向上を目標とする。図表を入れた文章と発表用のスライドの作成を通して、資料作成の構想から具体的な表現方法、資料の作成に必要な情報収集の方法などについても学ぶ。そして、プレゼンテーション演習やグループディスカッション演習を通して、論理的な思考力やコミュニケーション力も高めていく。 また、課題提出はメールを通じて行うため、Microsoft Office文書の添付ファイルを送受信できるメールアドレスを、講義開始前までに必ず用意すること。プレゼンテーション演習やグループディスカッション演習では、原則的にすべての受講生が発表する予定である。	
	自然と生物の科学	進化学と生態学を軸に進化のしくみと生物のくらしの概要を学ぶ。生物の営みと成り立ちについて、生物進化の視点から学び、進化と生物多様性の関連を理解する。自然と生物の在りようについて進化生物学、生態学の観点から説明し、進化生物学の基本的アイデアである自然選択と生物の多様化について理解できるようになることを目指す。また人間活動の生態系への影響と生物多様性の保全の社会的意義が理解できるようになることを目指す。	
	地震と火山 1	日本列島は大陸プレートの下に海洋プレートが沈み込む収束域に位置し、地震動や火山噴火、ならびにそれに伴う自然災害（津波や斜面崩壊など）が頻繁に起こる。このような地球上の場所はプレート境界に沿って帯状に分布するので、「変動帯」とよばれる。本講義では変動帯の特徴である地震と火山に焦点を当てる。また変動帯において発展した日本文化の諸相について紹介するとともに、そのような場で生活する私たちの生き方について考察する。	
	地震と火山 2	人間社会において、地震や火山活動がもたらす災害は多大なるダメージを与えている。したがって、地震や火山の活動に対する防災意識を養成しなければならない。地震や火山のメカニズムを理解することは、深刻な災害に対して人間がどのように考え、対処するべきかの視点を与える。そこで、地震や火山のプレートテクトニクスとの関わりを学び、地震と火山の基礎知識を習得する。そして災害に対する備えや意識を持ち、地球科学と社会活動とのあり方を考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	地球科学 1	現在の自然環境を考えるうえでは、自然を生み出す地球環境そのものの理解が重要である。地球環境を理解するためには多面的な理解が必要である。そのための視点として地球環境を構成するシステムについて理解する必要がある。そこで、地球表層で起こる気象現象や、地球を構成しているものについて学習する。その上で、地球のシステムが自然の道理の中で出来上がっている素晴らしいものであることを学習する。	
	地球科学 2	現代社会や文化は人間という要因だけで成立するものではない。人間という要因以上に、その人間が暮らす環境を作り出した自然環境が重要といえよう。したがって、気候風土といった地誌的な背景をもとに人間生活を生み出す地球環境を理解する必要がある。そこで、自然環境を、主に地球のシステムや地史的背景から学習する。これにより自然科学的な視点を加えて、人間社会や文化が成立した要因や背景を考察する力を養成する。	
	惑星科学	惑星について理解することを目的として授業を進める。惑星について学ぶことの意味を理解し、続いて最も身近な惑星である地球の内部構造・形成過程・生命の進化・物質循環について学ぶ。その後、太陽系の形成過程や地球型惑星と木星型惑星の形成過程の違いについて理解し、地球と水星・火星・金星の違い、木星型惑星と地球型惑星の違い、小惑星帯や太陽系外縁部の小惑星・彗星や隕石、太陽系の外の惑星について学ぶ。またその中で、惑星と生命の関係について考える。	
	地球環境と生命の共進化	「平均気温摂氏15度、酸素21%を含む1気圧の大気」、現在の地球はこのように穏やかな環境のもとにある。しかし、過去の地球はいつもこのように穏やかな環境にあったわけではない。46億年前太陽系の一員として誕生した地球は、灼熱の高温状態であった。その後徐々に冷却しながら海が生まれ、その中で生命の誕生と数々の生物進化を経て、生物と地球はお互いに影響を与えながら、その環境を変化させてきた。本講義では、私たちの生きている地球がどのような遍歴を経て現在に至ったのか、地球に起こった出来事を時間軸に沿って追って行く。固体地球の発達と生命の進化の関わりを中心に解説し、またそれらをひも解く地層や化石の見方、位置づけ、生活環境などとの関係も学習し、壮大な地球と生命の歴史と現在・未来の関連性を考察する。	
	生命のしくみと多様性	生命現象の背景にあるしくみについて、細胞生物学と分子生物学の視点から理解する。細胞やDNAなど分子細胞生物学と分子遺伝学の基本的概念を学び、生命現象の多様性の基礎となる共通性を理解する。細胞の代謝・遺伝の仕組み・生物の発生などの主要な生命現象のプロセスを理解し説明できるようになることを目指す。また分子細胞生物学の現代社会における医療や産業への応用とその社会的影響を認識し、説明できるようになることを目指す。	
	化石の科学	現在の地球に棲む生物は、40億年近い歳月の中で進化と絶滅を繰り返す中から生まれた。地層に保存された化石を用いて、生物の進化、生物の分類、古環境、地層の対比などを論じる学問を古生物学という。化石は過去の生物について様々な情報をもたらしてくれる。本講義ではまず化石とは何か、そして化石を用いて何が分かるかについて学ぶ。次に現在生きている地球上の生物について概観し、どのように分類されるか学ぶ。そして地質時代に現れた様々な古生物を時代順に紹介し、われわれ人類へと至る生物の歴史や盛衰を学ぶ。	
	星の世界	星と宇宙を巡る人類の認識の変化から科学や学問の前提条件を考える。宇宙つまりこの世界の始まりがどのようなであったか現代科学の成果を踏まえて議論し、宇宙や地球、我々人類や文明の成り立ちについても考察する。暦や自然放射線など日常生活に関りが深い事象についても解説する予定である。自然科学の前提や手法を理解し、その限界も見極める。恒星や宇宙に関して現代天文学が解き明かした成果を知り、自然科学の最先端が宇宙やこの世界をどのように捉えているか理解する。	
	こころの科学	心理学の基礎理論を理解することによって人間、とりわけ自己を心理学的に深く理解することを目指す。具体的には、無意識のこころ、コンプレックス、学習理論、しつけの仕方、知覚の理論、認知の発達理論、心理テストの実施などを予定し、人間のこころと行動の理解、心理学のおもしろさの発見、自分のこころとの出遇いを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	人間理解の心理学	人間の心理的発達理論を通して、青年期を生きる自己理解を深め、心理テストさらには人間に共通の心理特性への理解を深めて、対人関係を豊かにすることを目標とする。本講義では、(1) 人間の生涯にわたる心理発達の過程と発達課題を理解して、自己の過去を振り返り、現在を見つめ、将来を見渡すこと。(2) 人間の心理特性を理解して、円滑な対人関係を構築することを目指す。	
	人間関係の心理学1	「人間関係の心理学」は、テーマが対人関係であることから、日常生活ですぐにでも応用できる心理学である。親友、恋人との関係、上・下関係、等・・・喜びや苦しみなど、人の気持ちやこころの動きは人間関係がベースになっている。しかし、この人間関係が難しい。他の領域と同様、「人間関係」にも構造やメカニズム、機能がある。これをうまくやるには、まずこの基礎となる知識を身につけ、日常の人間関係に応用することである。私たちは、この知識をもつことにより、さらに人間関係が興味深いものになると思われる。	
	人間関係の心理学2	「人間関係の心理学」は、テーマが対人関係であることから、日常生活ですぐにでも応用できる心理学である。親友、恋人との関係、上・下関係、等・・・喜びや苦しみなど、人の気持ちやこころの動きは人間関係がベースになっている。しかし、この人間関係が難しい。他の領域と同様、「人間関係」にも構造やメカニズム、機能がある。これをうまくやるには、まずこの基礎となる知識を身につけ、日常の人間関係に応用することである。私たちは、この知識をもつことにより、さらに人間関係が興味深いものになると思われる。	
	コミュニケーションの心理学	販売員からの勧めによって、購入する予定のなかった商品を購入してしまった。他者の存在や他者とのコミュニケーションが自らの考えや行動を特定の方角に変えてしまうことがある。販売員からの勧めで購入してみたが、実際には自分に必要のないものだった。このように、他者が私たちに与える影響のうち私たちに経済的損失や精神的・身体的健康の被害など不利益をもたらすものも少なからず存在する。なぜ、他者の存在や他者とのコミュニケーションによって自らの考えや行動を特定の方角に変えてしまうのか。そして、どうすれば、こうした他者からの不当な影響から自分自身の身を守ることができるのか。本授業では、他者の存在や他者とのコミュニケーションが自らの考えや行動を特定の方角に変えてしまうような『説得』に関する社会心理学について学ぶ。説得によって、他者から巧妙に言いくるめられ、騙されたり、精神的・身体的な健康被害を被ったり経済的に搾取されたりしないための自己表現力を高めていく。	
	健康心理学	私たちの生活習慣に関わる健康行動には、心理的要因をはじめ、時代の社会的・経済的・文化的要因などが複雑に絡み合っている。こうした因果関係を多面的にとらえ、「現代人の健康」について理解を深めていく。また、各テーマに応じた心理テストの実施により、自己の健康行動を見直す機会とし、健康を維持・増進するために必要な行動について心理学的観点から考える。また、大学生にとって身近な健康行動を心理学的にとらえ、私たちの心と身体との関係を理解できるようになることを目指す。	
	心理療法概論	臨床心理学の基礎知識や心理療法の技法、さまざまな精神疾患について、事例を交えながら学ぶことで、心理療法・カウンセリングがどのようなものかイメージを持てるようになることを目指す。また、臨床心理学は実際に人と関わることが基本にあるため、さまざまな発達段階、精神疾患、パーソナリティを持つ人との関わりについても、考えることを目標とする。	
	心理療法と教育	臨床心理学の基本となるさまざまな事例に触れ、心理療法、カウンセリングで何が起きているのか考えることで、人のこころについても理解を深められることを目指す。また、学校場面での心理臨床の役割や、子どもへの心理療法の意味についても考えることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	行動の科学 1	この講義では、人間の一生涯の発達について学習する。まず、これまで提唱されてきた発達理論や発達理論の歴史の変遷を学ぶ。そして、人間の一生を胎児期から老年期までの6つのライフサイクルに分け、それぞれの発達段階における心身の発達の特徴をとらえ、各段階の発達の課題についても学習する。 人間の発達、身体的側面、心理的側面、社会的側面が複雑に絡み合いながら進むものであることを理解し、自分なりの発達観を発展させていくことを目標とする。	
	行動の科学 2	この講義で、人間発達学に加え、臨床心理学、社会・文化心理学に基づく知見を踏まえて、各発達段階と関連の深い問題を紹介する。それらの問題に、心身の発達段階や文化・時代背景を考慮しながらどのようにアプローチしうるのか、心理臨床の事例を通して学びながら、こころについて幅広い視点から考えられるようになることを目標とする。	
	脳とこころ	脳の機能の基本的な知識と、脳とこころの関係を理解するとともに、こころの病気について知識を深める。本授業では、講義は毎回短時間で、講義以外の時間は2～3人で話し合うことや、声を出す、体を動かす等の表現をすることを主体とし、自分の脳を実際によりよく使う練習を行うことで、脳とこころをよりよく使えるようになることを目指す。	
	カウンセリング	カウンセリングを、心理学の実践の場ととらえ、カウンセリングの基礎である臨床心理学を中心に、カウンセリングの理論を理解する。また、事例論文を読み、カウンセリングの流れをつかむ。考察の流れとしては、カウンセリングの歴史と背景、主要理論、対象と外的枠づけ、さまざまな技法、正常と異常の理解、カウンセリングが必要になるときなどの項目を学び、事例論文を基にした事例検討をおこなう。これらの考察を通して、カウンセリングの理論的背景や専門性を学び、精神的健康について理解することを目指す。	
	障害者・病者と共に生きる	授業の中心に据えるハンセン病問題への学びをとおして、「差別から人間が解放されるとは一体どのようなことなのか」という課題を深め、差別を見抜き、それを許さない自己自身の確立と、「共に生きる」ということを自らの課題として受けとめていくことを授業の目標とする。近現代日本の絶対隔離政策の実際とその背景および、厳しい隔離と差別の中で、人間回復の闘いを続けてきた人たちの運動の歴史と現在を学習し、「障害者」「病者」と共に生きるということ、各人の主体の上に確かめていく。	
	スポーツと健康の科学 1	本講義は、スポーツ現場で起こる様々な事象について心理学的視点から理解することを目的とする。具体的な講義内容は、1) スポーツ心理学の歴史的背景、2) 生涯発達の視点からみたスポーツ、3) スポーツにおける動機づけ、4) 運動好きと運動嫌い、5) 指導者の及ぼす影響、6) チームの心理（チームワークとリーダーシップ）、7) 怪我（心理学的意味と心理サポート）、8) スポーツ選手の心理サポートなどの諸点について考察を進めていく。	
	スポーツと健康の科学 2	本講義は、アスリートの心理サポート、特に試合の場における心理現象について考察していく。スポーツの試合場面での心理的問題を考え、その問題をどのように乗り越えるのか対策が立てられるようになることを目指す。具体的な講義内容は、メンタルマネジメントの実際として、1) アセスメント、2) 目標設定、3) セルフモニタリング、4) ピークパフォーマンス分析、5) 集中力、6) パフォーマンスルーティン、7) ピーキングメンタルマネジメントの諸事例を学んでいく。	
人間関係と身体表現	身体表現の一つとして、日常生活の中のノンバーバル（非言語）コミュニケーションについて基本的な理論についての知識を深め、身近にあふれているノンバーバルコミュニケーションの有用性に気づくことを目的とする。加えて、日常的な生活のなかで人間関係が円滑になる試みとしてのノンバーバルコミュニケーションが実践できるようになることを目標とする。授業内容は、毎回、1つの身体的コミュニケーションチャンネルに着目し、それぞれの機能や特徴、効果について知識を深める。また、集団での身体活動を伴ったゲームを体験し、ノンバーバルコミュニケーションについて総合的・実践的に学んでいく。		



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 自然生命系科目	生涯スポーツ・レクリエーション活動	本講義は、身体活動としてのスポーツと余暇活動をテーマとし、現代社会及び少子高齢化社会においてスポーツやレクリエーション活動が果たす役割について理解することを目標としている。生涯を通じてのスポーツ活動や余暇におけるレクリエーション活動が人々の健康や日々の活力にどのように有用な役割を果たし、また、どのような実践が必要なのかについての基礎的知識を獲得する。授業は、資料配付、ビデオ鑑賞、生涯スポーツ・レクリエーション実践、レポート作成などを交えながら展開する。	
	障害者スポーツ論	本講義では、障害のある人のスポーツへの理解を深めること、および、障害者スポーツ実践に役立てられることを目標としている。講義内容は(1) 障害者スポーツを知る、(2) 「障害」についての知識を身につける、(3) 障害のある人にとってのスポーツの意義を理解し、スポーツを通じたノーマライゼーションについて理解する、の3つを課題とし、その理解と実践のために、データ資料とビデオ資料を織り交えながら考察を展開していく。	
	スポーツ研究演習Ⅰ	運動処方やトレーニングの基礎理論について、講義・実習(含発表等)を取り混ぜながら授業を展開する。スポーツ実践を支える自己のからだ・心について具体的に考えながら、からだを動かすことの意味、スポーツとは何かについて講義では論理的に実習では実践的に考察する。自己の運動機能の状況を把握することを目的として、運動機能測定を実施する。また、運動処方やトレーニングについての理解度を深めるため課題レポートを作成する。	
	スポーツ研究演習Ⅱ	スポーツにおける心理的スキルやトレーニングの基礎理論について、講義・実習(含発表等)を取り混ぜながら授業を展開する。スポーツ実践を支える自己のからだ・心について具体的に考えながら、からだを動かすことの意味や心との繋がり、スポーツとは何かについて講義では論理的に、実習では実践的に考察する。そのうえで、自己の運動機能の状況を把握することを目的として運動機能測定を実施する。また、スポーツにおける心理的スキルとトレーニングについての理解度を深めるための課題レポートを作成する。	
	障害者スポーツ研究演習Ⅰ	本講義は、障害のある人のスポーツとからだを考えることを目的とする。具体的には、障害のある人のスポーツ(車椅子スポーツ、視覚障害者のスポーツ、レクリエーションスポーツ)の紹介とその実践を通して、障害や障害者スポーツについての基本的な知識を身につけ、障害のある人にとってのスポーツの意義を知り、障害の有無に関わらず参加できるスポーツを考察し、スポーツを通じたノーマライゼーションを理解する。また、討議とレポート作成を通じて障害者スポーツへの理解をさらに深める。	
	障害者スポーツ研究演習Ⅱ	本講義は、障害のある人のスポーツとからだを考えることを目的とする。具体的には、障害のある人のスポーツ(車椅子スポーツ、視覚障害者のスポーツ、レクリエーションスポーツ)の紹介とその実践を通して、障害や障害者スポーツについての基本的な知識を身につけ、障害のある人にとってのスポーツの意義を知り、障害の有無に関わらず参加できるスポーツを考察し、スポーツを通じたノーマライゼーションを理解する。また、討議とレポート作成を通じて障害者スポーツへの理解をさらに深める。	
	身体活動Ⅰ・Ⅱ	運動実践としての身体活動を通じて自己表現を高めることを授業テーマとする。バドミントン、サッカー、卓球を開講し、それぞれ基礎練習・ルール理解・スキルアップ・試合実践と段階的に授業を展開する。個人あるいは集団での身体活動の体験によって、受講生が自身のからだや心への意識を高めること、また、コミュニケーション能力や行動力を高めることを通じて、スポーツ活動を通じた自己表現力を高めることを目的とする。	
	身体活動Ⅰ・Ⅱ(障害者スポーツ)	障害がある人のスポーツ実践を理解することを第1の目標とし、障害のある人が実践しているスポーツ種目(車いすバスケットボール・ゴールボール・ボッチャなど)を受講者が実体験をする。個人あるいは集団でのスポーツ・身体活動を体験することによる受講生の自身のからだや心への意識の高まり、また、コミュニケーション能力や行動力の高まりを追求すると同時に、障害の種類や程度に応じて行われているスポーツ種目を実体験することで障がいのある人のスポーツへの理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	ドイツの歴史と文学	ドイツにおける「歴史」と「文学」、この二つの学問領域の相関関係について、学際的な考察をおこなう。具体的には、ドイツ語圏で誕生した文学作品を用いて、その作品の文学的意味と、作品が成立した歴史的背景について考える。また、ドイツ文化と日本文化の比較考察もおこなう。本授業では、はじめに、ドイツ語圏の文学作品の一つを選び、それを日本語で読む。次に、その作品のストーリーを追いつつながら、意味を読み解いていく。それから、作品の成立過程を歴史的、社会的、思想的な立場からの解釈を試みる。この一連の作業を通して、歴史と文学の相関関係についての理解を深めていく。	
	中国の歴史と文学	中国の人物について書かれた資料や文学作品、それらを産み出した歴史背景に着目し、それぞれの時代に必要とされた文学について観察し、各時代ごとの特徴やその後への影響などについて考究する。本授業では、さまざまなジャンルの文学作品を、歴史を追いつつ取り上げることによって、(1) 中国の歴史観と文学との関係における基礎知識を身につける。(2) 学んだことから現代の事象と関連づけて考える視野を広げることを目指す。	
	現代東南アジア事情	東南アジア大陸部、なかでも主にタイ国に住む人びとの暮らし、文化、社会について学ぶ。特に、変化の激しい現代社会において、タイの人びとがグローバル化社会にどのように適応しているのかを考察する。講義のテーマに沿った映像資料を適宜、視聴し、東南アジア大陸部、主にタイの社会、文化の概要を理解し、近代化にともなう社会変化におかれた人々の暮らしを理解すること、また、タイと日本とのつながりを意識することを目指す。	
	漢字の世界	私たちの日々の生活は、おびただしい数量の漢字に包まれている。漢字を知り、それを使いこなすことは、非常に重要なことである。本授業では、漢字の起源、漢字の成り立ち、漢字の歴史の変遷や漢字の構造、日本の国字などを通して、漢字文化について考察し、理解を深める。また、平素何気なく使っている漢字の成り立ちから、古代中国の民俗や文化を体系的に学んで、漢字の背景を理解したうえで、学生各人が文章力の向上することを目指す。	
	近代日本とアジア	19世紀における日本の歴史、特に誰でも知っているであろう「ペリー来航」という事件の周辺を、世界史の中の日本、東アジアの中の日本、という視点から描き直す。歴史の時代区分という問題、世界史における「近代」、東アジア史における「近代」、東アジアにおけるイギリスとアメリカ、ペリー来航の意義などの考察を通して、日本史／世界史という二区分の発想から頭を解放する。これらを通して、歴史を大きくとらえる視点を養い、一つの事件の歴史的な背景を探る姿勢を身につける。	
	古都の歴史と文化	京菓자에影響を与えた事柄(歴史・由来・銘・意匠・色)や人物(千利休居士・尾形光琳)を知ることにより、単なる食べ物としてではなく、総合文化としての京菓子の面白さ、楽しさを理解する。また、京菓子が平安時代にまでつながる文化の産物であり、日本独自の食べ物として今に伝わり生き続けているという観点から、映像資料や実際の季節のお菓子を見せながら、京菓子の成り立ち、その周辺での出来事までを取り上げて検証していく。	
	教育学 1	本講義は、教育観の歴史と教育の理念をテーマとし、教育と自分自身とのかかわりを考えるための基礎を培うことを目的とする。具体的には、西欧近代における教育思想とその背景にあることも観の歴史の変遷、および近代以降の日本における教育制度と教育実践の歴史的展開を考察する。教育の意義や目的について自らの問題として考えることができ、現代社会における教育の課題を理解し、それに対する自分の考えをまとめて討論に参加することが出来るようになることを目的とする。	
	教育学 2	教育と人間とはどのように関係しているのかを見ていく。まず、わたしたちの受けてきた教育を振り返り(第1回)、教育はどのように生まれてきたかを見る(第2回)。その後、以下3つの柱を中心にして、教育現象について授業を行なう。1. 子どもと教育(第3回・第6回)、2. 学校(教育)における病理現象(第7回・第10回)、3. 家庭と教育(第11回・第15回)。教育が人間に及ぼす影響について教育学の知見を学んでいくことはもちろん、社会学・心理学・哲学等、教育学の周辺領域についての知見も取り入れることで教育について深く考え、また、私たちが普段行なっているコミュニケーションやこれまでの学校教育・家庭教育で経験してきた教育にまつわる問題を、具体的にイメージしながら、諸学問の理論を身につけ、応用することができるようになることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	ドイツの言語文化	演習形式をとり入れた講義を行う。資料を提示し、問題点を指摘したうえで、共同で議論をしていき、ドイツ語圏の言語文化の特質を把握する。本授業では、ドイツ語圏の文化を理解するために必要不可欠なトピックについて、その概要と問題性を理解する。そのうえでこれらのトピックについて、現代的な観点および日本人としての観点から、主体的かつ重層的に考察する。ドイツ語圏の文化への理解を深める。また授業で取り上げた各トピックについて、現代的な問題意識から、日本の文化との比較をもふまえて、自分の見解を主体的に述べるができる。さらに自分自身の思考や判断を文章で適切に表現できることを目指す。	
	ドイツの民衆文化	近代の文芸が一般の作者の個人意識に基づく創作物であり、文字（書物）を介して読者に享受されるのに対し、民衆文芸は共同体の集会的文芸として口誦によって生活の場の中で享受されたものであった。この講義では、そうした民衆文芸の代表であるグリム童話を取り上げ、まず、この童話がどのようにして生まれたのかを述べる。ついで、象徴言語で書かれたこれらの物語にはどのようなメッセージが内蔵されているのかを、個々のメルヘンを取り上げながら論述する。これらを通じて、民衆文芸の本質を理解し、普遍的人間性に対する洞察を深めることを目的とする。	
	フランスの言語文化	映像を通してフランスの言語、文化について考察する。フランス語とはどのような言語なのかについて、基礎的な知識を習得するだけでなく、言語が文化とどのような関わりを持っているのかを歴史的な観点（17世紀の上流社会という文化の中で育まれた言葉遣い）から考察する。さらには現代のフランス映画作品『美女と野獣』を取り上げ、映像による具体的なイメージ、フランス語の表現などから、フランスの言語や文化の特徴を探っていく。	
	フランスの民衆文化	フランスの民衆文化を「映画」「大衆音楽」「文学」「食文化」という側面から鑑賞し、分析する。授業で興味を持った作品やテーマを自分から進んで鑑賞できるようにし、映像や音楽や印刷資料を通して、自分で情報を分析する力を養い、自分自身の眼でフランス文化を考察することができるようにする。また、既に知っている世界ではなく未知の世界へも好奇心を向けられるよう「半径1メートル以内の好奇心」から自由になることを目指す。	
	中国の言語文化	十二支の鼠、牛、虎、兔、龍、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪等の動物が中国ではどのようなものとして考えられていたのかを古代の文献に書かれた記述を根拠にして探っていく。授業は映像を見ながら講義形式で進める。十二支の内の鼠、牛、虎、兔、龍、蛇それぞれの動物が中国ではどのような象徴であるのか、そしてそれは何が根拠となっているのかを理解することであるが、更に時間がゆるせば、学生が中国の十二支への考え方と日本や韓国のもを比較して考察することができるようになることを目指す。	
	中国の民衆文化	「キリン」「コントン」「ホウオウ」「トウテツ」「レイキ」「キューウキ」「オウリュウ」「トウコツ」「ハクタク」など、中国の人々が思い描いた空想動物を通して、そこに見える理想の姿などから、中国の人々と文化の特色について考察する。授業で取り扱う事象について絵を描く課題を設ける。本授業では、中国の世界観と文化との関係における基礎知識を身につけ、学んだことから現代の事象と関連づけて考える視野を広げることを目指す。	
	チベットを見た日本人たち	近代日本のチベット学・仏教学の創成期に大きな役割を果たしたのが入蔵者すなわちチベットに足を踏み入れた者たちである。この授業では、彼らのうち本学とも関わりの深い（ともに浄土真宗大谷派の僧侶）能海寛（1868-1901）と寺本婉雅（1872-1940）の2人の行動と思想を中心として取り上げ、近代日本のアジア観・チベット観を浮き彫りにする。そこから、現代に生きる我々がアジアとともにどのように生きていくべきかという問題について考える。	
	朝鮮半島の美術	朝鮮・韓国の美術として日本で知られているのは、カラフルな色彩の工芸品や李朝白磁に見られる枯れた味わいの美術品ではないだろうか。実際には、繊細で流麗な筆線の仏画や愛らしい小動物を描いた絵画、豪華な螺鈿細工や高度な技術を駆使した緻密な細工をほどこした陶磁器なども朝鮮半島には存在する。同じ東アジアの美術でありながら中国とも日本とも違う魅力のある美術品について、なぜこのような美的世界が構築されているのかについて、朝鮮半島の歴史と結び付けて講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	東南アジアの宗教文化	この講義では、先ず、東南アジアの地理や歴史を概観した上で、東南アジアの宗教文化の全体像を把握しながら、その多様性を学習する。また、そうした東南アジアの宗教文化の源泉が何かを考え、それが当該地域でどのように変容していったのかを考える。次に、「仏教」に視点を当て、東南アジアに広まった各地の仏教の様態を学び、その共通性と多様性を確認する。そのことを通じて、東南アジアの宗教文化の特徴について理解を深め、東南アジアに広まった仏教の姿と、私たちが暮らす日本の仏教の姿との差異を捉えることを目指す。	
	インドの神々	インドの宗教世界を、「インドラ」や「ヴァルナ」「サラスヴァティー」「ブラフマン」「ブッダ」「ボーディサッタ」「ヴィシュヌ」「シヴァ」といった代表的な信仰対象を中心に概観し、その出現と変容とを通過して、複雑な宗教世界の成立過程を取り扱う。また、インドにおけるイスラム教やキリスト教のありようについても概観し、多様で複雑なインド宗教社会の様相を立体的に考える。これらを通じて、インドで生まれ崇拝された神々と、日本に暮らしてきた者たちの信仰との関連を学習し、インドの信仰世界の時代的な流れを理解することを目指す。	
	東アジアの宗教文化	中国近世の宗教と国家をテーマに、宋から清代に至る中国近世において、宗教は国家といかなる関係を取り結び、どのような歩みを辿ったのか、そこにいかなる宗教文化が形成されたのかを概観する。「大蔵経」と「道蔵」の開版、新儒教と新道教、仏道論争の経緯、宗教結社と秘密結社、宗教と「反乱」などの考察を通して、中国近世（10～19世紀）における儒仏道三教およびその他の宗教や民間信仰の歴史とそこから生み出される文化について基礎的な理解を得る。	
	仏教と美術	本講義は、荘厳の世界を具体的な事例をとおして考察していく。「荘厳」とは目に見えない仏の世界を形にあらわすことである。仏教に関わる美術や工芸が、寺院の荘厳をどのように実現しているのか、実際にその仕事に携わっている方々を講師として迎え、その技術や思想、歴史的・文化的背景について考察する。これらの荘厳に関わる一つひとつの文化が、どのように仏教と関わるのかを考えることを通じて京都の伝統文化のあり方を理解していく。	
	人と文化	男性と女性の身のまわりの出来事に視点を当て、そこに写し出される人間行動の諸相を明らかにする。男女差と文化、ジェンダー、結婚の類型、インセスト・タブー、同性愛、女人禁制などのテーマを考察していくことで、文化人類学がどのような学問なのかを理解し、その研究視点について修得する。そのうえで、「性」とは何かを考え、人類における男性と女性の多様な価値観を理解した上で、人間としての多様な生き方を模索できるようになることを目指す。	
	人と宗教	ヒマラヤ山脈の東端に位置する仏教王国であるブータンの伝統的な宗教文化と儀礼を通して、そこに住む人々の生活観・価値観を学ぶ。一方で現代化の中でブータンが直面している様々な問題、例えば、環境問題や情報化、難民問題について、ブータンの人々がどのように対応しようとしているのかについても紹介する。異文化に対する理解を深めるとともに、ブータンの人々の考える「幸福のカタチ」を日本におけるそれと比較しながら、人類にとっての宗教と幸福の在りようについて考える。	
	芸術表現	芸術表現が総合的に現われるのは舞台芸術である。舞台芸術はそれが生まれた地域の文化に大きく影響され、その文化が反映されている鏡とも言える。本授業において受講生は教員の指導のもと、インド古典舞踊でも用いられる「ムドラー（手印）」を用いた表現や、フォークダンス、ハリウッドダンスなど、インドの様々な舞台芸術を体験し学び、自身の表現方法を探る。授業の最後には、受講生に身体表現を用いた実技の発表を行ってもらう。これらを通し、インドの舞台芸術の技法を身につけ、自分の個性を生かした表現を発揮できるようになることを目指す。	
	ブッダに学ぶ	この講義は、古代インドに登場したゴータマ・シッダータという青年がブッダ（目覚めた者）と呼ばれるようになったその意味を考えることを主題とする。ゴータマは何を問おうとしたのか。ブッダに成ったとはどういうことなのか。仏教について学びたいという方のために、ブッダの生涯や仏教思想の基礎的な事柄を扱う。この講義を通して、現代の社会で生きる私たちにも仏教から学ぶべきものがあることを確かめる。そして、私たちがどのように生きるべきかを考えることになる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目 歴史文化系科目	親鸞に学ぶ	親鸞といえ、その名前は多くの方が知っているだろう。「悪人成仏」「他力」などの言葉で語られるその思想は、これまで多くの人の生き方に影響を与えてきた。それは、現代の私たちが抱える問題に対しても大きな示唆を与えてくれるものである。この授業では、親鸞について学びたいという方のために、親鸞の人生のあゆみをたどり、親鸞の言葉を読みとくことで、その生涯と思想の基本的な事柄を学ぶ。それは親鸞という一人の仏教者に、私たち一人ひとりの生き方を学ぶことにもつながる。	
	仏教福祉論	新しい時代を迎えて、地域社会では宗教／仏教の役割が各方面で期待されている。本講義では、スピリチュアルケア学について概論的に説明するだけでなく、緩和ケア医療の臨床に日々携わる者として、事例を多く提供して具体的な学びを共有したい。併せて、海外なども含めた、平和運動や先住民族運動などの社会活動などと学びを共にする宗教活動についても、開教使（海外での布教活動）を踏まえて、紹介したい。	
	部落差別と大谷派教団 1	差別とは何かについて、部落差別を中心に考察し、部落差別とは、いかなるものであるのかを、一人ひとりの問題意識を通して学ぶ。具体的には、テキストを丁寧に読み込みながら授業を進めていく。真宗の教えに樹って、差別するとはどういうことかを自己の内容として確かめる。本願寺の歴史と部落差別の概要を理解することを目指す。	
	部落差別と大谷派教団 2	部落差別と大谷派教団との関わりをたどり、差別を傷む心の回復を求める。本授業では、部落差別の過去と現在を概観し、部落差別と仏教、ことに真宗大谷派教団との関わりはどのようなものであったかを、親鸞と当時の被差別民のありかたや、大谷派教団の差別事象、差別事件等を通して見ていく。また、これらを通して、大谷派にとって部落差別という問題のもつ意味を考察する。	
	部落差別と浄土真宗 1	大谷大学人権問題学習テキスト『差別のない世界を求めて』の精読をとおして、差別とは何か、部落差別とは何か、人権とは何かについて学ぶ。部落差別問題とは、誰が、何を、どうしようとするものなのか、また何を願われ、願いとするものなのかを考察し、学習の主体と目的、視座と精神を明らかにすることを目指す。	
	部落差別と浄土真宗 2	真宗の教えに樹って、差別とは何か、部落差別とは何か、人権とは何かについて学び、人間が人間であるためにどのように生きていくべきかを考えていく。前期における学習は、初めて知見することが多い。後期は、その学習が知的学習に終始するのではなく、わが身に問いかける学習に転じていくような内容としていく。部落差別問題とは、誰が、何を、どうしようとするものなのか、また何を願われ、願いとするものなのかを考察し、学習の主体と目的、視座と精神を明らかにすることを目指す。	
	部落史論 1	本講義では、被差別部落の歴史について、とくに前近代に焦点を絞り考えていく。部落問題は日本社会の在り様に深く根ざした社会問題であり、被差別部落の歴史を知ることは、日本社会の課題を深く探ることにつながる。部落差別はいかにして生まれ、悪質化したのか？そして、なぜ、今も部落差別は存在し続けるのか？受講生のみなさんとともに議論し、学びあっていくこととしたい。	
	部落史論 2	本講義は、明治維新から現代までの部落の歴史を明らかにし、差別の根本的な解決を目指す。なぜ部落差別が今もあるのか、その理由を追究することは、近代日本社会に内包する諸課題を明らかにすることでもある。また京都市内の被差別部落へのフィールド・ワークを実施し、研究と体験を踏まえ、差別が存在してきた歴史と社会を根底から見直す視点を確立する。	
	反カースト運動論	1. カースト制度と呼ばれてきたものとは何かについて説明する。2. ヴァルナ体制・不可触民制に対して仏教が持つ視点を確かめる。3. カーストからの解放を求めて仏教に改宗したアンベードカルとインド独立の父とも称されるガンディーについて学ぶ。4. 仏教の視点から共に生きることについて考える。	
	アイヌ民族と共に	アイヌ民族に対する「同化政策」の歴史と、同化政策に抗ってきた人たちの姿に向き合うことを中心に、差異(ちがひ)を認め、差異を尊重できるあり方について考える。授業テーマに即して、「沖縄問題」についても、積極的にアプローチしていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代総合科目	歴史文化系科目	アジア侵略と宗教	人権理論、平和理論の今日の到達点を学び、日本国内はもとよりアジア太平洋地域を始めとする世界の人権・平和問題を分析する視点を培う。特に、戦前、戦中の宗教とりわけ仏教者の言説を中心に歴史を掘り起こし、その課題を探る。平和を否定し戦争を正当化する思想（皇国史観・靖国神社問題等）について学び、グローバルな人権と平和について考察する。	
		非戦の系譜	明治期の対外戦争への批判の跡をたどり、現代に生きる自らの戦争観をはっきりさせる。特に日露戦争における社会主義者、クリスチャン、仏教者の反応の跡をたどり、開戦論、非戦論の双方をみながら、明治後半期の日本の課題と現代に生きる私たちの戦争観を考える。第10回以降の授業では、国家の社会主義弾圧と大逆事件について、テキスト「高木顕明の事跡に学ぶ学習資料集」を中心に理解を深めていく。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。